

近世における西洋人の日本人観

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

66

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

68

(発行年 / Year)

2019-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022519>

近世における西洋人の日本人観

宮 永 孝

はじめに

- 一 十三世紀——暗に日本に言及した修道士ギョーム・リュブリュキ
 - 一 “ジパング”（日本）のほら吹き男——マルコッポ
 - 一 西洋人の日本民俗観（十六世紀～二十世紀）
 - 一 日本人がみた異邦人（白人と黒人）
 - 一 “印象”が形づくられる心理過程
 - 一 概評 西洋人がみた日本人の国民性
- 一ロ 　　むすび

はじめに

政府の最近の発表によると、わが国をおとずれる外国人の数は、年間ゆうに二、四〇〇万人をこえているらしい。⁽¹⁾この数字の中には、観光や商用その他の用事でおとずれる者もふくまれる。何がかくも多くの外国人を日本に引き寄せているのかふしぎである。

物見遊山におとずれる外国人だけでも、年に二、一〇〇万人をこえているから、日本はいまや観光の国といえそうである。観光でおとずれる外国人は、短期間わが国に滞在し、さまざまな印象や体験を国にもちかえる。そして折にふれ、じぶんの見聞や体験をひとにかたる。

ことにかれらが日本滞在ちゅうに観察してえた——日本ならびに日本人についての印象なり感想は、かならずしも正しい眼識をしめしたものでなく、なかには誤解に満ちたものもあるかも知れない。一国の特性、一国民の性格（国民性）や民族性についての認識の形成は、観察者のいっきの直感によるものであり、実ははなはだたよりないものである。

いま筆者がいちばん関心があるのは、日本とはどんな国なのか。日本人とはどんな人種なのか。日本人の持続的かつ固有の国民性とはどんなものなのか、それらについて知ることである。

ふだんわれわれは、この種の問題にほとんど注意をむけないし、またあまり考えることもしない。が、来日外国人の急増を機に、考察することはあながち無意味なことであるまい。他をもって我を知るために、古き時代にわが国をおとずれ、日本を探究した外国人の眼にうつった日本の性格——国民の心情などを、かれらの著述を手がかりとしてさぐってみたい。

しかし、これらについて正確妥当な判断をくだすことは、至難のわざである。が、皮相の^{げん}見をのべることは可能である。ふつう「国民性」というと、一国民または一民族の全体が、共通してもっている性質や感情、またはその特性をいうようである（『国語大辞典』小学館）。が、いいかえると、それは国民の大多数が共有していると思われる「性格特性」、「意識・行動特性」なのである（喜多川忠一『日本人を考える 国民性の伝統と形成』日本放送出版協会、昭和58・10、一八頁）。

われわれが国民性を意識したり、問題にするのは、外国人との比較においてである（前掲書、一九頁）。が、日々の生活においてそれを意識することはない。国民性が形成されるのは、各民族や国民がもつ長い伝統的な生活様式——風俗習慣——社会体制——文化様式などによってである。要するにその土地の状態、気候、地質や人間社会の変せんが、国民性を形づくることに寄与しているといえる。

わが国は古代の氏族社会から出発し、武家社会、天皇制絶対主義社会をへて、いまの資本主義制自由社会にいたっている。が、明治から第二次世界大戦後、日本人の生活様式やものの考え方、感じ方に、欧米の影響がみられるとしても、日本人本来の性質（たち）に大きな変化はないようだ。

筆者が本稿において主にめざすものは、つぎの点である。一つは十六世紀から二十世紀（室町「戦国」時代から、安土桃山、江戸、明治期にいたる約三百七十年間）に、わが国をおとずれた外国人の眼に写った日本および日本人のすがた、その国民性について歴史的に概括することである。二つは古き時代の日本人が異邦人（白人や黒人）をみて、どのような感想をもったのか、それについて点描しようとしたことである。三つはわれわれ日本人や外国人が、人とはじめて会ったときに直接的に得る「印象」（意識に現れる像——直感像）が、どのように形づくられるのか、その心理過程としくみを知ることである。四つは二十一世紀の国際化時代のこんにち、先進国の人びとは、日本および日本人をどのようにみているか

を、研究者による、最近の世論調査と分析によって知ることである。

ことに国民性といった、漠としてつかみどころがないものをしっかりと把握し、それを定型化することは、ひじょうにむずかしいといわねばならぬ。どうかすると構造的に捉えることができず、うわつらにさわるだけで満足せねばならぬかも知れない。研究の方法も、民族学・歴史学・社会学・言語学・心理学などの立場からおこなうやり方など、いろいろあるようだ。が、筆者は文献・資料に基礎をおいた方法を探り、外国人の著述にみられる共通した表現——類似した性格特性の描写を吟味することによって、設問に答えようとした。

外国人（西洋人）がはじめて日本に来たのは、十六世紀（わが天文年間）である。東アジアとの貿易や伝道を策して来日したポルトガル人が第一号であり、ついでスペイン人・オランダ人・イギリス人・ドイツ人・フランス人がやってくるようになった。かれらはじぶんの体験や布教のようすを談話や書簡や報告書のかたちで、また旅行記・視察記として刊行した。が、中には来日したこともないのに、既刊の日本報告をもとに著述する者もいた。

本稿では来日の直接体験によって著わした文献の記述と来日の経験のない者の間接的な文献にみられるそれをも参考資料とした。来日外国人の主観的な叙述（一次資料）にせよ、第三者のそれ（二次資料）にせよ、それが日本人の国民性の特徴を実証するものかどうかは何ともいえない。が、いまのところ、この問題についての答をえようとしたら、この文献学的方法しかないのである。

この稿において引用した文章の中には、こんにち不適切な術語が多々あること。また訳語の一部を改めたところもあることをお断りしておく。

一 十三世紀——暗に日本に言及した修道士ギョーム・リュブリュキ

極東に「ジパング」（日本）という神秘のベールにつつまれた国があることを、はじめてヨーロッパ人に伝えたのは、イタリアの旅行家マルコ・ポーロ（一二五四～一三三四、中国名・孛羅）とされている。一二七一年かれはペルシャから天山南路をへて元の大都（北京）にいたり、フビライ（一二一五～九四、モンゴル第五代大汗、チンギス・ハンの孫）に仕え、中国各地を訪れ、一二九五年故郷のヴェネチアに帰った。

一二九八年ヴェネチアとジェノヴァとの海戦に加わり、ジェノヴァ軍の捕虜となり、獄中でピサ出身の仲間ルステイケロに口述したのが「東方見聞録」（一二九八年成立）である。かれは中国滞在ちゅうに耳にはさんだジパングについての奇聞（珍しい話）を、この中でおもしろ、おかしく語っている。

通説によると、マルコポーロの口述本「東方見聞録」こそ、わが国をヨーロッパに伝えた嚆矢をみられている。が、「東方見聞録」が成立する四十年ほどまえに、東方の不老国日本のことに言及した者がいる。フランスの修道士ギョーム・リュブリュキ Guillaume Rubruquis (一二二〇?～九三?)である。

フランス王ルイ九世(一二一四～七〇)は、布教師リュブリュキに、ローマ教皇インノケンティウス四世(一一九四～一二五四)の親書をもたせ、一二五三年モンゴルの大汗のもとに派遣した。かれは二年後の一二五五年帰国すると、中央アジアについての旅行記をラテン語で著わした。Itinerarium fratris Wilhelmi de Rubruquis, 1253 (『修道士ギョーム・リュブリュキの旅行記』一二五三年)がそれである。

リュブリュキは、同書において、中国の東方に不老国があることを記している(英訳本の第四九章²⁾)。

かれら(狩人)は、また事実として、こんな話をした。(しかし、わたしは信じる気はないが)。カタイア(中国)のむこうに一国があり、どんな年齢の者でも、いったんその国に入国すると、その者は齢をとらない。³⁾

中国の始皇帝(前二五九～二一〇)は、不老長寿の靈薬をもとめ、大勢の若い男女と技術者を東方の三神山に派遣した。が、失敗におわった(「史記」巻百十八「淮南衡山列伝」)。いずれにせよ、中国のむこうにある国とは、日本のことであり、このリュブリュキの記述こそ、日本のことを暗にヨーロッパにつたえた最初の文章であるようだ。

ついで中国の東方海上に大きな島があり、独立の王国をなしていること。この国は自然の要塞をなし、偶像崇拜の風習があること。さらにこの国が金銀に富む「宝の島」であると語ったのは、くだんのマルコポーロであった。かれはじぶんが耳にした日本についての話を誇張し、俗うけするように仕組んだ。ジパングは、大陸から一五〇〇マイルはなれた東のほうの公海にある島国という。その国土は大きく、住民の容貌はよく、習俗は文化の域に入り、かれらは偶像をおがむ仏教徒である。

この国を統治しているのは王(天皇)であり、外国の干渉をうけない独立国である。この国は山ほど金を産出する。王はその黄金を外国に出すことを禁じている。商船の往来は、きわめてすくない。王宮は黄金でおおわれている。屋根といわず天井も黄金でふいてある。室内の床、広間や

窓や机も金づくめであり、とても想像はできない。

この国はまた、まるい大つぶのバラ色の真珠をたくさん産出し、それは白い真珠以上に高価である。この島でひとが亡くなると、土葬か火葬にするが、埋葬式るとき、死者の口のなかに真珠をふくませるならわしがある。その他宝玉もたくさんある。

そのことを聞いた元の皇帝クビライ（一二一五〜九四）は、このジパングを領有しようとし、軍船を派遣した。が、将官のうちわけんかや暴風が北から吹いてきて破船したり、兵が陸上に遺棄されたりし、遠征は失敗した。

ジパングの仏教徒は、牛やブタや羊の頭をおがんだり、ときに三頭や二面をもつ偶像を拜跪はいきしたりするとも語られている。

マルコポーロの「東方見聞録」が印刷されたことにより、ジパングの存在がヨーロッパに伝播されたわけであるが、日本が黄金や宝玉を多く産する国であるというのは誇張や流言、あるいは虚言であろう。しかし、『東方見聞録』が出版されてから、西洋人は東洋へ関心をもつようになり、ジパングの名はやがてトスカネリ（二三九七〜一四八二、イタリアの天文、地理学者）の「世界地図」（一四七四年）にあらわれた。

一 西洋人の日本民俗観（十六世紀〜二十世紀）

伝聞によらず、じっさいじぶんの目で日本の島を目撃したり、上陸した西洋人がいた。つぎにのべるアントニオ・ガルバンの『諸国発見記』（一五六三年）は、ポルトガル人による日本発見の最初の史料とみられている。

ヨーロッパ人が日本諸島についてたしかに知ったのは、一五四二年（天文11）のこととされている。ポルトガル人アントニオ・ガルバン Antonio Galvão（一四九〇〜一五五七、軍人・植民地駐在官）は、生前小冊子「諸国発見記」を執筆し、没後一五六三年（永禄6）にリスボンで刊行された。この本は、西洋人（ポルトガル人）がいつ日本に渡来したかを知る有力な史料の一つとなっている。⁴⁾

同書は、近代におけるスペインやポルトガルの海路と陸地の発見について、年代史的に叙したものである。ガルバンは、ポルトガルの植民地マルク諸島中のテルナーテ島（インドネシア北東部）の総督として、声望が高かった。信心深く、心清らかにして、私欲のないポルトガル



アントニオ・ガルバン

紳士⁽⁵⁾であった。が、総督として在任した六、七年間の施策（善政）が政府に不信の念をいだけせ、帰国後不遇であった。余生を他人の功名偉業の編さんの仕事⁽⁶⁾に送り、貧困のうちに亡くなった。

西洋人のなかで『日本の発見史』について説く者は、かならずといってよいくらい、アントニオ・ガルバンのこの小冊子に言及している。筆者は先づリチャード・ハクルート（二五二頁～一六一六、イギリスの地理学者）による英訳本「全97頁」（The Discoveries of the World from their first original unto the yeere of our Lord 1555. Briefly written in the Portugall tongue by Antonie Galvano, Governour of Ternate, the chiefe Island of the Malucos: (……) Londini, Impensis G. Bishop. 1601）と、原文（ポルトガル文）⁽⁷⁾に接する機会があったので、その日本発見の記事をひいてみよう。

英訳本は十七世紀のつづり字を用いているため、ところどころ判読困難であるが、おおむねつぎのような文意である。

西暦一五四二年にディエーゴ・デ・フレイタスという者が、船長としてシャム王国のドドラ（現・タイ南部バンコックの北方にあるアユタヤ——引用者）にいたとき、三人のポルトガル人が、かれのもとから逃亡し、ジャンク⁽⁸⁾に乗ってシナ（中国）へむかった。（ジャンク⁽⁸⁾というのは一種の船である）。

その者たちの名前は、アントニオ・デ・モタ、フランシス・ゼイモト、アントニオ・ペイショットであった。かれらは針路をリアンポの町（寧波⁽⁹⁾——杭州の東南東一四〇キロ。南北朝時代から日本や朝鮮半島との往来がさかん——引用者）にとった。その町の緯度は三〇度あまりである。かれらは船尾にはげしい風雨をうけ、洋中に吹き流されること数日、東方三十二度の方角に一つの島をみとめた。かれらはその島をジャパウン⁽¹⁰⁾（日本）と命名した。ジャパウンはジパングリ島と同じものようだ。この島については、パウルス・ヴェネトゥス（ベネチア人のマルコ＝ポーロ——引用者）が、島とその富について言及している。またこのジャパウンという島は、金銀その他の財宝に富んでいる（The late discoveries, p.92）。

注・この文章の後半あたりに、欄外注記“Japan discovered by chance”（偶然ジャパンを発見した）がある。

ディエーゴ・デ・フレタス船長の元部下三名は、日本発見者の榮譽をになった。が、かれらが（北緯）三十二度の方位（鹿児島と熊本の間）あ

たり)に、ジャバウンをみた(ジャンクから望見した)という文章をのぞくと、われわれはかれらがその後どうなり、何をしたのかよくわからない。が、ディーゴ・デ・コート著『アジア志第五句年史』(一七七八年)によって、あるていど消息をうる事ができる。それはつぎのような内容である。

——三人のポルトガル人は、ジャンクに毛皮その他の商品をつみ、中国の泉州港(福建省南東部)を目ざし、広東(華南地区中部)を通過した。それから十五日ほど経たるとき、島と島との間に打ち流され、いずことも知らず投錨した。間もなく陸地(種ヶ島?)から数隻の舟がやってきた。かれらから、その諸島は“ニ・ボンジ”^{ニ・ボンジ}という^{ニ・ボンジ}と聞いた。ポルトガル人らは、この島をジャバウンとよんだ。

一同上陸すると、親切に遇された。その島でジャンクを修理し、商品を銀にかえた。その後ときをへてマラッカに帰った。⁽⁸⁾

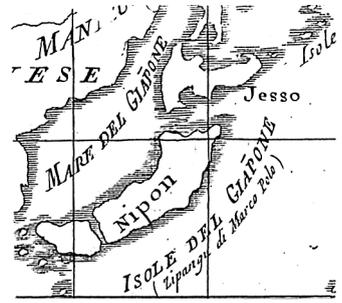
マルコポーロは、ほら吹き男とすれば、かれにおとらず大放言家であったのは、フェルナン・メンデス・ピント(一五〇九?〜八三、ポルトガルの旅行家)である。この男も妄言(でまかせの言葉)をさかんに吐いたようである。

かれは一五三七年(天文6)ごろから、アフリカやアジア諸国を旅行し、日本へも四度きたとされている。ピントの一行は一五四四年(天文13)ごろ、コーチン——広東——寧波をへて、ジャンクに乗りかえ、さらに北上をつづけた。が、海賊におそわれ仲間をうしなったり、暴風により漂流したのち、タニスマア島(種子島)に漂着し、島主ナウタキン(直時)に面会した。

ピントの仲間ディオゴ・セイモト Diogo Zeimoto は、このとき鉄砲や火薬の製法をつたえたとされ、ピント一行が滞在五ヶ月半にして島をさるとき、島内に鉄砲が六〇〇挺あったという。⁽⁹⁾ピントの『東洋遍歴記』Peregrinação de Fernam Mendes Pinto の初版が、著者の死後三十年たって一六一四年(慶長19)リスボンで刊行されたのち、英仏独語に翻訳された。が、かれが東洋を放浪した二十一年間に見聞したものを、事実として正確に叙述したかという点になると、ひじょうに怪しく、用心してよまねばならぬものとされている。

ガルバンの著書に出てくる三人のポルトガル人が、はじめて日本の島をみたのは、一五四二年(天文11)とすれば、翌一五四三年(天文12)九月末ごろ、種子島の西海岸——西村小浦に百余人をのせた異国船(ジャンク)が漂着した(『鉄砲記』南浦文集「原文は漢文」)。

この船はどここの国のものともわからなかったが、船中に安徽省(中国東部)のひと五峰(王直ともいう)という商人がいて、村役人・織部丞と海岸の砂に文字をかいて筆談した。この中国人は文字に明るい儒生であるばかりか、東南アジアと交易をやっている巨商であり、漂着した船は



19世紀の日本列島。Di Marco Polo e degli altri viaggiatori, Veneziani, vol.I, Co' Tipi piccottiiani, Venezia, 1818 より。

五峰の持船であった。

ピントの記事（肝心の年月日がない）と「鉄炮記」の記事は、ひじょうによく似ているのである。「鉄炮記」には、種子島に漂着した異国船のポルトガル人として、

牟良叔舎 (Francisco のことか)
 牟良叔舎 (Francisco のことか)
 喜利志多・陀・孟多 (Antonio da Mota のことか)
 喜利志多・陀・孟多 (Antonio da Mota のことか)

* 欧語は引用者が入れたもの。

といった名前が出てくるが、ピントの名はないのである。

ピントはじぶんの怪しい著書において、あたかもじぶんが種子島（日本）に漂着した三人のポルトガル人のひとりになぞらえている。

ポルトガル船（じっさいはジャンク）が種子島に漂着して四、五年後の一五四九年（天文18）八月、フランシスコ・ザビエル（一五〇六〜一五三三）スペインの宣教師）は、中国のジャンクにのり鹿児島に上陸した。以後、かれは平戸・京都・山口において二年数ヶ月布教につくしたのち日本を去った。

日葡の交渉は、その後ますます活発化し、貿易商人や宣教師がひきもきらず日本にやってきた。

つきにかかげるものは、十六世紀から二十世紀（わが天文年間から明治期）の約三百七十年間に、わが国をおとずれ、わが国の状況や日本人をじっさい見たり、接した古き外国人の日本見聞録である。それは当時の日本をじぶんの眼でみて、さまざまの感懐を抱いた記録であるが、ふつうならうかがい知ることができぬ歴史的な興味もすくなくない。

たとえ、それがはずれの取るに足らぬ感想であったとしても、当時かれらがわが国土や日本人をどのように捉えていたのか、わが国民性を考えるうえで好個の資料といえる。

本稿で引用した西洋人の日本研究文献は、つぎのようなものである。

(著者——来日し、日本でくらしただことがあ
る者)

- フランシスコ・ザビエル (一五〇六～五三)
- ゴンサロ・フェルナンデス (生没年不詳)
- アレックスサンドロ・ヴァリニャーノ (一五三九～
一六〇六)
- ルイス・フロイス (一五三二?～九七)
- ロレンソ・メシア (生没年不詳)
- ルイス・フロイス
- アピラ・ヒロン (生没年不詳)
- フェルナン・メンデス・ピント (一五〇九?～
八三)
- ジョアン・ロドリゲス・クズ (一五六一?～
一六三四)
- エンゲルベルト・ケンペル (一六五一～一七一
六)
- カール・ピーテル・トゥンベルグ (一七四三～
一八二二)
- イザーク・ティチング (一七四四～一八二二)
- ワシリー・ミハイロヴィチ・ゴロヴニーン
(一七七六～一八三二)

(書簡または書名)

- 書簡
- 書簡
- 『東インド巡察記』
- 『日本教会史』(三卷)
- 英訳『日本誌』(二卷)
- 『一七七〇年～七九年にわたるヨーロッパ、ア
フリカ、アジア旅行記』
- 『日本風俗図誌』
- 『日本幽囚記』

(執筆年または刊行年)

- 一五四九・一一・五 (天文18・10・16) 付
- 一五六〇・一二・一 (永禄3・11・14) 付
- 一五八〇年? (天文8)
- 一五八一・五・一九 (天文9・4・17) 付
- 一五八一・一〇・八 (天文9・9・11) 付
- 一五八五 (天正13)
- 一五四九～一六一五 (天文18～元和元年)
- 一六一四 (慶長19)
- 一六二〇～三六 (元和6～寛永13)
- 一七二八 (享保13)
- 一七八八～九三 (天明8～寛政5)
- 一八二二 (文政5)
- 一八一六 (文化13)

*アーチボルド・キャンベル（一七八七〜？）

G・F・メイラン（一七八五〜一八三二）

ヘンドリック・ドゥーフ（一七七七〜一八三

五）

J・F・ファン・オーフェルメーア・フィッセ

ル（一八〇〇〜四八）

フィリップ・フランツ・シーボルト（一七九六

〜一八六六）

アオグスト・リュードルフ（生没年不詳）

ローレンス・オリファント（一八二九〜八八）

ラザフォード・オールコック（一八〇九〜九

七）

ロバート・フォーチュン（一八二二〜八〇）

ルドルフ・リンドゥ（一八二九〜一九一〇）

フリードリヒ・アルベルト・オイレンブルク

（一八一五〜八一）

フランシスコ・ディアス・コバルピアス（一八

三三〜八九）

エメ・アンベール（一八一九〜一九〇〇）

『世界周航記 一八〇六〜一八一二年』

『日本』

『日本回想録』

『日本国の知識への寄与』（『日本風俗備考』）

『日本』

『日本における八ヶ月』（『グレタ号 日本通商

記』）

『中国・日本へ特使エルギン伯を派遣した話

——一八五七〜一八五九年』〔二卷〕『エルギ

ン卿遣日使節録』

『大君の都——日本滞在三年記』〔二卷〕

『江戸と北京——日本と中国の首都への旅行談』

（『幕末日本探訪記 江戸と北京』）

『日本周遊旅行』（『スイス領事の見た幕末日

本』）

『プロイセンの東アジア遠征記』

『一八七四年十二月八日の金星の太陽面経過観

測のためのメキシコ天体観測隊日本旅行』

『絵入りの日本』〔二卷〕（『アルベール 幕末日

一八一六（文化13）

一八三〇（天保元）

一八三三（天保4）

一八三三（天保4）

一八三二〜五四（天保3〜安政元）

一八五七（安政4）

一八五九（安政6）

一八六三（文久3）

一八六三（文久3）

一八六四（元治元）

一八六四（元治元）

一八七六（明治9）

一八七六（明治9）

ラファエル・ケーベル（一八四八～一九二三）

本図絵 上下）
『ケーベル 小品集』
博士

一九一八（大正7）

（口述者または著者——日本に來たことがない者）

*ギョーム・リュブリュキ（一二二〇？～九三三？）

マルコルポロ（一二五四～一三三四）

フワン・ゴンサーレス・デ・メンドーサ（一二五四～一六一八）

四一五～一六一八）

ヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテン（一五六三～一六一二）

五三三～一六一二）

ルイス・デ・グスマン（一五四三～一六〇五）

*フランソワ・ソリエ（一六一八～九二二）

*ジョバンニ・ピエトロ・マフェ（一五三三？～一六〇三）

一六〇三）

アルノルドゥス・モンタヌス（一六二五～八三三）

三）

ピエール・ベール（一六四七～一七〇六）

ジャン・クラッセ（一六一八～九二二）

シャルル・ド・セコンダ・モンテスキュー（一六八九～一七五五）

六八九～一七五五）

*ルイ・モレリ（一六四三～八〇）

（書名）

（刊行年）

『修道士ギョーム・リュブリュキの旅行記』

『東方見聞録』

『シナ大王国誌』

『東方案内記』（『ポルトガル領東インド水路記』）

『東方伝道史』

『日本の各王国および諸島の教会史』

『東西インド史』

『日本図録』
アトラスヤポネシス

『歴史的批判的辞典』

『日本教会史』（『日本西教史』）

『法的精神』

『歴史大辞典——一名神聖かつ不敬な物語の珍文集』

『歴史大辞典——一名神聖かつ不敬な物語の珍文集』

『歴史大辞典——一名神聖かつ不敬な物語の珍文集』

『歴史大辞典——一名神聖かつ不敬な物語の珍文集』

『歴史大辞典——一名神聖かつ不敬な物語の珍文集』

『歴史大辞典——一名神聖かつ不敬な物語の珍文集』

『歴史大辞典——一名神聖かつ不敬な物語の珍文集』

フランソワ・マリ・アルエ・ポルテール（二六

『哲学辞典』

一七六四（明和元）

九四（一七七八）

*フレデリック・エドワール・フレシネ（一八一

『日本 歴史と叙景——風俗・習慣および宗教』

一八六四（元治元）

七（八三）

〔二卷〕

*は邦訳のないもの。

キリスト教を日本へ伝えたイエズス会士ザビエル。

ザビエルが日本および日本人について、またキリスト教を受け入れる可能性の有無について知ったのは、日本にくる二年前——一五四七年マラッカ（マレー半島の西岸）において、日本人ヤジローと接し、同人から日本事情をえてからである。ザビエルは、もし汝がわたしと共に日本へおもむいたら、日本人はキリスト教徒になるかどうかたずねると、ヤジローは、日本人はすぐ信徒にならないだろうと答えた。

日本人はまずいろいろ質問し、相手の話に納得してはじめて信奉者になるであろうといった。つまり布教師の答を研究し、その者のふだんの行動を観察し、いうことと行ないが一致しているかどうかたしかめてから信徒になる。日本人は理性（道理）にしたがって行動する国民であると答えた。

ザビエルが日本に着いたのちえた、日本人についての印象の大略は、およそつぎのようなものである。

これまで交際した異教徒のなかで、日本人はもっともすぐれている。日本人は礼節をおもんじる。概して善良であり、悪心をいだかず、名誉を大切にす。国民は一般に貧しいが、それを恥辱とはおもわない。武器（刀剣）を珍重し、これを信頼している。大いに知識をもとめ、デウス（神）のことを聴き、話の内容がわかったとき、大いによろこぶ。天性に反する悪習をつづけると、その性質はよごれ、また欠点を見すこすと、徳を完成することができない、と考えている。俗人（一般人）のほうが坊主よりも行状がよいようだが、坊主を尊敬することはなほだしい（ザビエルがゴア「インド南西岸のポルトガル領」のサン・パウロ・コレジョのイルマンらに送った書簡——一五四九・一一・五「天文18・10・16」

付)¹¹

イエズス会士ゴンサロ・フェルナンデズ。

日本人は色が白く、見識があり、ひじょうに礼儀正しい。衣服に注意を払う。食事のとき棒（ハシ）を用いる。美食家であるが、その量はすくない。かれらは何でも食べるが、坊主だけは牛肉をたべない。この地はポルトガルとおなじ食糧を有しているが、その額はすくない。労働せず、飢えている者はひじょうに多い。この地はひじょうに寒い（イルマン・ゴンサロ・フェルナンデズがゴアより、コインブラ「ポルトガル中部の古都」のヤソ会のコレジョの某に送った書簡——一五六〇・一二・一「永禄3・11・14」付）。

イエズス会士アレックスサンドロ・ヴァリニャーノ。

ヴァリニャーノ（一五三九〜一六〇六、イタリアの宣教師）は三たび来日しているが、日本人司祭を養成するための教育機関の設置、天正遣欧使節の立案と派遣、活字印刷機の招来など、文化的功績は大きい。かれが著わした『東インド巡察記』（一五八〇年ごろの成立）は、イエズス会インド管区の主なる布教地の巡察報告書でもあるが、この中に日本の国情や風俗、文化に関するものが多々みられる。

その大要は、左記のようなものである。

日本の全域は、さまざまの島からなり、三つの地方もしくは主要な島々にわけられる。もっとも大きな島（本州）には、五十三の王国がある。日本は寒く、雪が多い。この国は北緯三〇度から三七、八度にかけて位置しているからである。国民はみな色白であり、洗練されており、ひじょうに礼儀正しい。ゆえに他のあらゆる人種よりもすぐれている。

日本人は、生来ひじょうにすぐれた能力をもっているが、どんな学問ももっていない（西洋流の哲学や倫理神学についての知識がない意）¹²。世界中の人種のなかで、もっとも好戦的なのは日本人であり、戦争に没頭している。日本人は、人を殺すことを、動物を殺すことよりも重大に考えていない。

日本人は世界中のあらゆる人種のなかで、もっとも偽善的で外見をとりつくり国民である。日本人はひじょうに貧しい。王（天皇）や領主でも、わずかのものでやっと食べている。家臣に土地を分割してきたため、手もとにわずかの収入しか残らないからである。

ヨーロッパから日本へやってくる新来者は、日本人がおこなうあらゆる事柄——日本人との会話の方法、衣服の着方、礼儀作法、食事や着座の

方法などをまなぶ必要がある。日本ではインドやヨーロッパのものとは異なる作法、習慣、規範が通用している。

ルイス・フロイス（一五三二？～九七、長崎で没す）は、布教のため安土から越前に入ったとき、野次馬からその服装を嘲笑されたり、口ぎたなくののしられたり、あなどられたりした。が、説教を聴きに来た各種の平民は、概して珍奇をこのむとしている。日本人は珍しいものに偏愛をしめすという（越前北庄〔福井市辺の旧称〕から日本に在留する司祭に送った書簡——一五八一・五・一九〔天正9・4・17〕付）。

豊後の府内（大分市の旧称）や臼杵（大分県東部）で教育機関を設けるしごとに従事していたロレンソ・メシヤ司祭は、神学生として入学した日本人は、幼いときからよい教育をうけ、礼儀正しく、労働をよろこび、デウスのことを知るようになる、有徳の道にすすんでいると報告している（ペロ・ダ・フォンセカ司祭宛書簡——一五八一・一〇・八〔天正9・9・11〕付）。

ルイス・フロイスの「日欧文化比較」（天正十三年〔一五八五〕に加津佐でまとめた小冊子）の中に、ヨーロッパ人と日本人の身体的差異についての記述がある。ヨーロッパ人は、概して背がたかく、体格もよいが、日本人はかれらに比べて、身長も体格も劣っている。ヨーロッパ人の鼻は高く、ある者はワシ鼻である。が、日本人は鼻がひくく、鼻孔は小さい。日本人は色は白いが（黒人やインド人とくらべての意）、それはきわめて少ない。ヨーロッパ人の間では、あばたのある男女は珍しいが、日本人の間ではそれはきわめてふつうである（岡田章雄訳「大航海時代叢書 XI」所収、岩波書店、昭和40・9）。

アビラ・ヒロン（生没年不詳）は、スペインの旅行家・商人である以外、その履歴は明らかでない。一五九四年（文禄3）フィリピンの第三回使節フランシスコ会のアグスティン・ロドリゲスらと日本船に便乗し、八月二十七日に平戸に到着した。その後かれは二十年ほど日本に滞在し、主として長崎でくらしした。その住居は、サンタ・マリア教区（紺屋町）にあった。ヒロンは、じっさい日本でくらし、日本人の風俗や習慣をわが眼でみ、多くの日本商人や宣教師らとの交際を通じて情報をえ、また宣教師の報告や欧文書籍を参考にして著わしたのが、『日本王国記』（天文十八年〔一五四九〕～元和元年〔一六一五〕の成立）である。

同書にみられる日本記事（第一章から第六章）は、日本人の起源、土地、日本人の外貌、習慣、衣装、家屋、市町村の体制、国家の統治、宗教、強力な領主などについて描いており、その叙述はケンペルの『日本誌』を想い出させる。その摘要はつぎのようなものである。

ヒロンの観るところ、ハポン（日本）は、不確定で気持ちがよい王国なのである。この王国の移りかわりはひじょうにはげしいものであるから、たとえ毎年おなじ報告をつくるとしても、つねに更新の必要が生じる。

日本王国の人びとその土地、この国の起源がチナ（中国）にあることは間違いない。日本王国はひじょうに豊かであり、この地の女性は多産である。そのため主要な二つの島（本州と九州）、のちにその他の地方にも住民がふえ、あふれるまでになった。

この王国の人びとは風采がよく、色白であり、髪は黒く、ふつうあごひげは少ない。鼻のたかい、眼の大きな者も多い。しかし、大多数ものの鼻は、横にひろがっている。女は色が白く、目鼻だちがよく、うつくしく、しとやかである。男はひじょうに残忍であるが、女はなさけ深く、礼儀正しい（『著者のハポンについての解説、第一章——日本人の起源、日本人の外貌など』、佐久間正 会田 由 共訳『アピラ・ヒロン 日本王国記』所収、岩波書店、昭和40・9）。

ジョアン・ロドリゲス・クズ（一五六一？～一六三四、ポルトガルのイエズス会宣教師）は、一五七六年（天正4）に来日し、一五八〇年（天正8）イエズス会に入り、府内のコレジオで修学した。大友義鎮（宗麟）の知遇をうけ、また豊臣、徳川両政権の通訳をつとめた。『日本文典』（一六〇四年）、『日本教会史』（一六二〇～三六の成立、稿本）などを著わした。

『日本教会史』の草稿は、本にすると三巻もある大部なもので、第一巻はアジア概説、シナ総説にはじまり、日本の地理、衣食住や礼法、茶の湯について説き、第二巻は学術技芸、第三巻は教会史そのものを記したものである。いまその要点を摘記すると、つぎようになる。

日本諸島は、世界の二大地域を占めるアジアとノーヴァ・エスパーニャ（メキシコ）とアメリカ（新世界）とを両分する大洋のなかに位置している。

全島のうち最大のものは大島（本州）であり、その中央に国王の宮廷があり、四十九ヶ国をふくむ。シナ人は日本のことを古くは倭奴、倭奴国とよび、これを日本語では、倭奴とか倭奴国というが、その意味は奴僕（男の召使）または奴隷の国ということである。これはかれらが日本をさげすんでつけたものである。

シナ人は日本（にほん、にっぽん）のことを、かれらの言葉で、ジョプエン、ジェプエン（広東や福建のことばで）と発音し、ポルトガル人は

それを訛ってジャパウン Japao という名をえた。ポルトガル人によって、日本が発見された当初、われわれヨーロッパ人は、日本のことを、^{クラド}棒の島^ラとよんだのは、日本の海賊（倭寇）がシナの海岸を荒しまわっていたからである。

いかなる民族が、日本諸島に移り住んだのか。いろいろの地方から、いろいろな時代に移住者があったことはたしかである。シナや朝鮮や日本の史書から、日本の一部にシナの浙江、福建や近接している高麗^{カッリ}から、九州の島に移り住んだと考えられ、奥州地方にはタタール人が移住したと推断される。

日本諸島について、はじめてヨーロッパに伝えたのは、ヴェネツィア人のマルコポーロであった。かれはカタイオ（シナ）に関する物語のなかで、日本のことをジパングと訛ってよんでいる。これらの諸島の発見者は、ポルトガル人が最初である。

ロドリゲスによると、ポルトガル人が日本諸島や琉球のことを耳にはさんだ経緯は、つぎのようなものであった。

一五一一年（永正8）……アルフォンソ・デ・アルブケルケ（一四五四〜一五二五、ポルトガルの軍人。二代目のインド総督）は、マラッカ（マレー半島西岸）占領後、ヨーロッパに日本諸島の情報をつたえた。

一五一八年（永正15）……フェルナン・ペレス・デ・アンドラーデ（生没年不詳、ポルトガルの航海者。最初の遺明使節）は、マヌエール王（在位一四九五〜一五二二）の使節として、船団をひきいて広州府（華南中部）にいたとき、琉球のことを聞き、船を派遣したが、福建あたりから引き返した。

ポルトガル人が日本諸島の最初の情報をえたのは、アントニオ・ガルバンの『諸国発見記』（一五六三年刊）によってという。⁽¹³⁾
ピントのものは作り話の書物であり、同書にある他の多くのことと同様に偽りである。

日本人は、白色人であり、適度の色をしている。丸顔で顔たちはよく、内陸のシナ人に似ている。が、広東人には似ていない。鼻はコーリア人（朝鮮人）に似ている。紅毛碧眼^{こうもうへきがん}（西洋人）をひじょうに奇異に感じている。

日本人は生来のすぐれた資質と鋭敏な才能をもち、われわれのすべての精神的、思索的な学問とシナ語とを理解する能力をもっている。このことは宗教上の奥義についての説教をきくとき、きわめて鋭い、細かい質問にみられる。日本人は本来の道理に従順であり、それにしたがう。

日本人はシナ人やコーリア人以外とつきあわず、また知識がなくても、元来じぶんや日本民族についてつよい自負心をもっている。だから性質は、尊大にかまえ（思いあがって、偉そうに人を見下す）、高慢である（うぬぼれが強い）。他民族をみたり、聞いたりしても、じぶんの方がすぐれていると思っている。

日本人はひじょうに表裏のある心の持主である。かれらは三つの心を持っているといわれている。一つは口先のもの（実のともなわない、うわべだけのもの）。これはだれにでも真実でなく、うそだとわかる。第二の心は、友人にだけ示す胸のうちにある。第三の心は、心の奥底にあり、じぶんのためだけのものである。

日本人は、異国人を大いに歓待し、好意をしめす。が、シナ人やコーリア人は、まったく逆で、かれらは異国人を軽べつする。かれらは力よく、気が小さく臆病であり、自国を失ないはしまいかと用心深い。日本人は勇敢なうえ、大胆である。

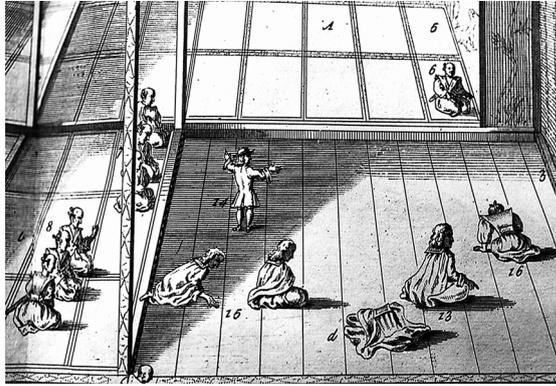
東方のあらゆる民族のなかで、日本人ほど神聖なものを極度に崇拜し、それを信仰する民族はいない。かれらは寿命、健康、財産、繁栄、子孫などのために、偽りの神々に祈るだけでなく、偽りの誤った道においても、来世における救霊を心底から求めている（第十章 日本人の容貌と生来の資質と性向について」、土井忠生他訳『ジョアン・ロドリゲス 日本教会史 上』所収、岩波書店、昭和42・10）。

エンゲルベルト・ケンペル（一六五二〜一七一六、ドイツの医学者、歴史家）は、一六九〇年（元禄3）オランダ東インド会社の医官として長崎に來航し、二年ほど出島に滞在したのち帰国の途についた。レイデン大学で医学の学位をとったのち、十一年ぶりで故郷ドイツのレムゴーにもどり、領主の侍医となった。医師としてのかたわら、まずラテン語で *Amoenitatum Exoticarum*（邦訳名『廻国奇観』——ペルシャやアジア諸国の博物学的な書物）を著わし、その死後、ドイツ語で書かれた主著である『日本誌』の英訳 *The History of Japan*（二巻）が、一七二八年（享保13）ロンドンで刊行された。

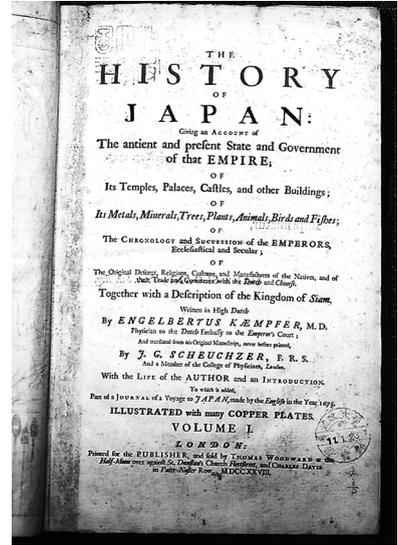
スイス生れの医師ヨハン・カスパル・ショイヒツァー（一七〇二〜二九）が英訳した『日本誌』（一七二八年）は、各国語に訳され、十八世紀のヨーロッパ知識人の日本観を決定づけるのに影響力があったとされる。¹⁴

江戸時代、ケンペルはわが国において「検夫児」や「検夫爾」と表記され、天保三年（一八三二）『日本誌』の最初の部分（「西洋人検夫児日本誌」——第一章バタバアからシャムへの旅行）が、三宅友信（一八〇六〜八六、幕末・維新期の蘭学者。三河国・田原藩主の庶子）によって訳

ケンペルの『日本誌』の概要は、つぎのようなものである。



江戸参府のオランダ人謁見の図。
ケンペルの『日本誌』(1728年)より。



ケンペルの『日本誌』(1728年)。
法政大学附属図書館 貴重書

された。ついで志筑忠雄(一七六〇〜一八〇六、江戸後期の天文学者、蘭学者)は、嘉永三年(一八五〇)ケンペルの『日本誌』の抄訳「異人恐怖伝」「三冊」(一名「鎖国論」——日本の鎖国を否定するもの)を刊行したが、幕府から絶版を命じられた。これは巻頭にある「全国を鎖して、あえて異域の人と通商せざらしむる(外人と商業取引をさせない)ことは、利益になるかどうか、通交の道をやぶるとしたら、その罪は大きいばかりか、人殺しにひとしい」——つまり鎖国は天理(自然の道理)に反するものであるとした文章が、幕府の忌にふれ発禁となった。

明治十三年(一八八〇)四月、坪井信良(一八二三〜一九〇四、幕末の蘭方医。

幕府の奥医師。維新後、東京府病院長)は、「検夫爾日本誌」(上巻、中巻、下巻、附録、別冊——十六冊からなる)を脱稿した(内閣文庫蔵)。

ケンペルは来日した翌一六九一年(元禄4)と九二年(元禄5)商館長について、二度参府旅行にくわわり、見聞をひろめた。当時は五代將軍綱吉の治世である。かれは江戸城において綱吉の謁見をうけた。第一回目の参府(元禄4・2)のとき、「蘭人四人とも御簾(すだれ)のていねい語(まえ)前にめして御覧あり。音曲を聞きしめ給ふ」(「徳川実記」といふ)。

このとき綱吉は、みすの奥からオランダ人四名の姿をみ、かれらがつま弾く楽器をきいたということであろう。

ケンペルは、日本滞在中、通詞兼従者・今村源右衛門(一六七二〜一七三六)の協力をえて、ほう大な資料(和書、地図)をあつめ、また出島に出入りする乙名(町内の顔役)や通詞、役人らから、日本に関する情報を収集した。

現住民の呼び方だと、日本はふつう「にっぽん」であり、軟らかい音調だと「にほん」となる。スペイン人が、所領を新世界においてふやしたように、ポルトガル人は東インドにおいて領地を拡張し、日本を発見したが、それは偶然のことである。その名譽はポルトガル人に帰すべきものである（坪井信良訳「検夫爾日本誌」）。

日本国は、イギリスのような島国である。イギリスより島の切れ目が多い。イギリスが三つの島からなるように、この国も三大島からなる。もっとも大きい島は本州である。この島は西から東へながく伸び、顎骨（あごの骨）のような形をしている。

ヨーロッパの地理学者は、たいいてい日本人の先祖はシナ人である、といった意見をのべている。ある皇帝（秦の始皇帝）の侍医は、不老不死の妙薬をつくるためには、日本だけにしかない薬草を無垢の男女につみとらせる以外に方法はないと奏上し、大勢の者をしたがえ日本へ渡った。その医師の目的はただひとつ、皇帝の暴虐から逃れることであった。かれはじぶんに付き従った者とともに日本の始祖になった。紀の国の熊野にこのとき移住した遺跡があるという。

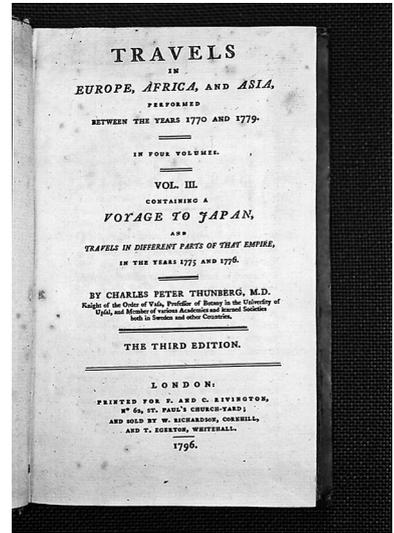
中国人と日本人との異同点について。

両国民は精神の傾向そのものが大いに異なっている。中国人は平和をこのみ、ひかえ目であり、静かで思索的な悟りの生活様式を愛する。他方、かれらはペテンと暴利にひたる。これとは反対に日本人は、好戦的であり、むほんやふしだらな生活を送る傾向があり、疑いぶかく、野心的であり、いつも大それたことをもくろんでいる（Engelbertus Kaempel: The History of Japan, Thomas Woodward, London. 1728, p.86）。

日本人（とくに本島の一般人）は、体がじょうぶで健康である。肌色はやゝ褐色であり、まぶたが厚いため、目がほそく、小さい。鼻はやゝ扁平であり、たいいていあばた面である。しかし、家柄のよい旧家や大小名などは、ふつうみかけよく、鼻もヨーロッパ人のように、かなり高い。

サツマ、日向（宮崎県と鹿児島県の一部——引用者）の人々は、背丈はなみであり、体は頑丈である。ことばや素質は、男性的である。西国の人びと、とくに肥前（佐賀、長崎の旧国名——引用者）の人びとは、背がひくく、ものやさしい。奥州の人びとは気性がはげしく、残忍である。

日本本島——とくに東部地方の人びとは、たいいてい背がひくく、肉づきよく、頭でっかちであり、だんご鼻の者が多い（今井 正訳『エンゲルベルト・ケンペル 日本誌 日本の歴史と紀行 上巻』「ドイツ語からの重訳」霞ヶ関出版、昭和48・5）。



トゥンベルグの『ヨーロッパ、アフリカ、アジア旅行記』の英訳（1796年）。
法政大学附属図書館 貴重書

これまで述べてきたものは、わが国の鎌倉時代から江戸時代の中ごろまで——西洋人がイメージした、またその眼に映じた日本やその国民についての特性を紹介したものである。ここでいう西洋人とは、イタリア人、フランス人、ポルトガル人、スペイン人、オランダ人、ドイツ人などであり、かれらが日常従事したことは、商業や伝道、探検、医業、学問（神学研究）などである。このうちエズス会士のようにじっさいわが国を訪れ、その見聞にもとづいて、じぶんの意見を形づくった者もいるが、大半は来日した宣教師の日本民俗に関する報告によって著述したものである。

だからときに独断にみち、信びよう性に欠け、一般論に陥ったのはやむをえない。つぎにのべるものは、江戸中期から幕末にかけて来日した西洋人（長崎出島の商館長、医官、遣日使節、外交官など）が見聞した日本人観である。

カール・ペーテル・トゥンベルグ（一七四三—一八二二、スウェーデンの植物学者、のちウプサラ大教授）は、一七七五年（安永4）六月、バタビア（ジャカルタの旧称）より、三層の甲板船「スタフェニセ」号にのり、長崎へむかった。かれはオランダ東インド会社の医官として一年ほど日本に滞在した。その間に日本の植物を採集し、帰国後『日本植物誌』（一七八四年、ライプチヒ刊）や、『一七七〇年—七九九年にわたるヨーロッパ、アフリカ、アジア旅行記』（一七八八—九三、ウプサラ刊、四巻）を著わした。

日本に関する部分——第三巻、第四巻において、トゥンベルグは、日々見聞したものと日本人の長短をそのまま、記述した。

日本はアジアの最東端に位置している。アジア地域とは完全に独立した、三つの大きな島と多くの小さな島々からなっている。

大部分のヨーロッパ国民は、この帝国をヤパンまたはジャポンとよぶ。日本人じしんはニポンまたはニホンといい、中国人はシッポンまたはジーペンという。国中はほとんど山と丘、谷ばかりであり、大平原を目にすることはない。海岸のまわりは山と岩壁、波風の荒れくるう海である。

ほとんどの港について、ヨーロッパ人はまったく無知である。

山の高低はまちまちである。あまり急斜面でないかぎり、たいてい頂上まで耕作されている。夏の暑さはものすごく、海風が涼気をもたらさないかぎり堪えがたい。冬の寒気も、北および北東の風がふくとたいへんきびしい。雷雨、嵐、台風、地震もしばしばおこる。

日本人は体格よく、しなやかであり、手足はじょうぶである。しかし、かれらの体力は、北ヨーロッパ人のそれにはおよばない。男性は中背であり、ふつうあまり太っていないが、肥満の人をみたことがある。肌の色は黄色、ときに茶色になったり、白くなったりもする。日本人の眼は、楕円形ではそく、ふかくぼんでおり、目を細めているようだ。眼は褐色というより黒色である。大ていの者は頭が大きく、首はみじかく、髪の毛はくろく、油で光っている。鼻はひくいとはいえないが、太くみじかい。

国民性は、賢明にして思慮ぶかく、従順にして礼儀正しい。好奇心に富み、勤勉で器用である。節約家であり、酒をのまない。きれい好きであり、善良で友情にあつい。正直にして誠実、うたがい深く、迷信をこのむ。高慢であるが寛容である。悪をゆるさず、勇敢にして不屈である。

日本人は野蛮な民族ではない。礼儀をわきまえた民族である。自由は日本人の生命いのちである。それはわがままや放らつに流れることなく、法律にもとづいた自由である。法はきわめてきびしく、一般の日本人は、専制下における奴れいと思われてきたようである。

礼儀正しいことと服従の点で、日本人に比肩するものはほとんどいない。お上かみにたいする服従と両親への従順は、幼ないときからすでにうえつけられている。

他の多くの民族と同様、日本人は好奇心が旺盛である。かれらはヨーロッパ人が持ってきたものや持物なら、なんでも熟視する。そしてあらゆる事柄について知りたがり、オランダ人が苦痛をおぼえるほど質問攻めにする。

將軍謁見のとき、宮殿（江戸城）において、老中や幕府高官から、頭のとっぺんから足先までじろじろみられた。それはわれわれの帽子・剣・衣服・ボタン・飾りひも・時計・ステッキ・ゆびわなどにまで及んだ。またわれわれの文字や書式をみせるため、かれらの面前で、字をしたためざるをえなかった。

高慢（うぬぼれ）は、日本国民の大きな誤りの一つである。じぶんたちの神聖なる起源は、神・天・太陽・月にほかならぬと思ひこみ、他の人種よりすぐれていると思っている。とくにヨーロッパ人は、劣っていると思っている。ポルトガル人がこの国から放逐されたのは、その高慢さのせいであり、オランダ人との貿易が破滅するとすれば、それは高慢さに他ならないであろう（高橋 文訳『ツェンペリー 江戸参府随行記』平凡

社、平成6・11)。

イザーク・ティチング(一七四四〜一八一二、長崎出島の商館長)に、『日本風俗図誌』(一八二二年)と題する著述がある。おもな内容は、日本の歴史(エピソード的な記事)や日本社会の風俗習慣・民俗について記したものである。が、ところどころに、日本人の国民性についての断片的な記事がみられる。それらをひろうと、つぎのようになる。

礼節の点で、日本人はもっともすぐれたヨーロッパ国民に劣らない。日本人は幼ないときから、祖先の英雄的な業績を耳にし、母の乳をのみながら、名誉を陶酔的なまでに愛することを吸収して育っている。日本人は、どんなささいな侮辱にたいしても鋭く反応する。

日本人はヨーロッパの政治について知識がない。ヨーロッパの強大な国の偉大さと国力は、その国の商業貿易の力によるものであることを知らぬため、商業をひじょうに軽侮している。農村と職人のほうが、商人よりも社会の構成員として役にたつものと考えた。日本人は、武士という職業をもっとも高貴な職業と考えている。

身分の高い、じっさい政治に通じている日本人の多くは、日本が世界第一の国と考えており、国外で起っている事件には、ほとんど注意を払わない。このような人々は、開明派から『井のなかの蛙』といった有名な比喩で呼ばれている(沼田次郎訳『ティチング 日本風俗図誌』雄松堂書店、昭和45・12)。

ゴロヴニン(一七七六〜一八三一、ロシアの軍人、海軍中將)は、ディアナ号艦長として世界周航の途中、一八一一年(文化8) 国後で幕末にとらえられ、松前で獄中生活を送った。一八一三年(文化10) 釈放され、帰国後、見聞や虜囚体験、諸書を参考にして著わしたのが『日本幽囚記』(一八一六年)である。

十六世紀のころに、日本はヨーロッパ人に知られるようになった。はじめてこの国を発見したのは、ポルトガル人であった。そのころ新発見地征服熱が、当時の最強海軍国をもっともつよく支配していた。ポルトガル人は、日本を征服する意図をもって、例のごとく通商と、平和な住民

へのカトリック教布教によってことをはじめていった。

日本人の悪い性質についてのどっち上げ話が、ヨーロッパ人のあいだで大いに広まった結果、ことわざにまで日本の敵意とか、日本的狡猾さ(悪がしこき)という表現が使われるようになっていた。

日本人が聡明でけいがん(するどい眼力)なことは、外国人にたいするかれらの態度、国内統治上の態度によってじゅうぶん証明される。

われわれが美德の一つに数えている資質のうち、現在日本人に欠けているものが一つだけある。それはわれわれが剛毅、勇氣、果断と称するものであり、またときに男らしさというものである。しかし、彼らが臆病であるとしても、それは日本の統治の平和希求的な性質によるもので、この国民が戦争をしないで享受して来た永い間の太平のためである。

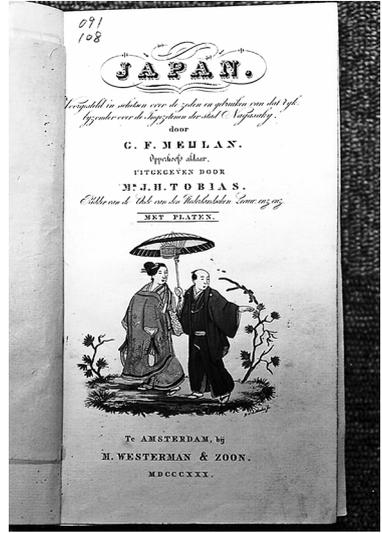
日本人は節儉(せつけん)ではあるが、吝し(せう)くではない。日本人は天下を通じて、もっとも教育の進んだ国民である。日本には読み書きのできない人間や、祖国の法律を知らない人間は一人もない。

日本人はあらゆる階級を通じて、応待がきわめて鄭重である。日本人同志の礼儀正しさは、この国民の本当な教養をしめすものである(井上満訳『日本幽囚記 下』岩波書店、昭和49・5)。

アーチボールド・キャンベル Archibald Campbell (一七八七?、グラスゴー近郊で生れたイギリスの船乗り)に、A voyage round the world from 1806 to 1812; in which Japan, Kamtschatka, the Aleutian islands, and the Sandwich Islands, were visited……Edinburgh, 1816 (『世界周航記——一八〇六〜一八二二年』)と題する航海記があり、この中に数日間寄港した長崎のようすや日本人についての記述がみられる。

著者のキャンベルがアメリカ船「イクリプス」号(ボストンの新造船、乗員二十八名)にのり、長崎に入港したのは一八〇七年(文化4)六月六日のことであった。このころ日本近海に、外国船が出没するようになり、国内では海防論が高まった。一八〇四年(文化元)には、ロシア使節レザノフ(一七六四〜一八〇七)が長崎に来航し、通商をもとめたが、幕府の拒否にあっている。幕府は一八〇六年(文化3)撫恤令(情けをかけめぐんでやる)を出し、ロシア船が来航したら、薪水・食糧をあたえ追いつくことを下達した。

このときこのアメリカ船は、ロシア国旗をかかっていた。長崎湾に入ろうとしたら、無数の日本の引き船がやってきて、停泊所まで曳いていった。湾の中ほどまで来たとき、出島の「オランダ大使(商館長)がやってきた。かれは英語が話せた。



メイランの『日本』(1830年)。
法政大学附属図書館 貴重書

商館長は、入港した船がアメリカのものであり、乗組員もアメリカ人であることを知ると、ロシア国旗をおろすようにいった。先年、レザノフの艦が入港したことで、日本人が憤慨していると語った。イクリプス号は投錨すると、日本の警備船八隻にかこまれ、銃や弾薬の提出をもとめられた。

船長ジョゼフ・オキーンは、役人から日本にきた理由をたずねられると、真水と新鮮な食糧がほしいといった。

翌日、水・魚・ブタ・野菜などを積んだ小舟が多数やってきた。これらはすべて無償で提供された。三日目、船長はこれ以上当港にいても意味がないと判断し、日本側にあずけた武器・弾薬をうけとると出帆した。キャンベルがうけた長崎および日本人の印象は、つぎのようなものであった。

——長崎の町は島によって隠れている。しかし、陸地をみると土地は大いに耕作され、人口も多いように思えた。日本人は中国人の風ぼうと肌の色をしていたが、かれらより背丈がある (p.30)。

G・F・メイラン (一七八五〜一八三一) は、バタビアで財務検査官をつとめたのち、一八二六年 (文政9) 長崎出島の商館長として来日し、帰国後日本の風俗習慣に関する著書『日本』(ヤパン) (一八三〇年) をアムステルダムで刊行した。このなかに日本人評 (性格論) についての記事が散見する。

思えば、日本人たちの性格において主な特徴をなしている。彼らは勇敢なことを、そしてそれによって世界中で唯一つのいまだ征服されなかったことのない国家であることを誇りとしている。

一つの国土に住んでいるのに、恐怖からか、または政策からか、または十人の数の非武装オランダ人が友人とみなされながら、その国の最大の、そして人口の多い町の一つに自由に滞在することを許されず、このわずかな数の無防備な客人たちが囚人のごとく監禁されている。

日本人たちは、神の子孫であり、そしてかれらの国土は、地球上でもっとも祝福された場所であり、それは神々が、かれらの直接の末裔たちが住むために選ばれたものだと言っている。そこから私が最初のところですでに述べておいた、かれらの性格の中の誇りの高さと思いが、その主要な特徴として作り出されている……（庄司三男訳『メイラン 日本』雄松堂出版、平成14・1）。

ヘンドリック・ドーフ（一七七七～一八三五、長崎出島の商館長）は、一七九八年（寛政10）に来日し、一八一七年（文化14）に帰国したが、日本滞在は十九年にもおよんだ。館長として江戸参府を三回おこなった。滞日中、蘭日辞典「ハルマ和解」（一名「長崎ハルマ」）を完成したことで知られている。ドーフは自著『日本回想録』（一八三三年）において、日本人の気質、風俗、慣習にすこしふれている。

旧（大陸の）半球のもっとも東にある日本について、ポルトガル人・フランス人・ドイツ人・オランダ人の著作がたくさんあるが、この国はヨーロッパでなおよく知られていない。

前世紀のはじめに、ケンペルが公刊した本が、いまなお最良のものである。日本人は一般にひじょうに勇敢であり、危険をものともしない。かれらは上官や將軍の命令を、盲目的に完全に遂行する。かれらはさげすまれて生きるより、むしろ死にたいとのぞむ。日本人は、役人として幕命を守らず、あるいはこれを完遂できなかったとき、このさいこの手段（切腹）をとることはまれではない（永積洋子訳『ドーフ 日本回想録』雄松堂出版、平成15・8）。

フィッセル（一八〇〇～四八、オランダの出島商館員、荷倉役）の『日本国の知識への寄与』（『日本風俗備考』一八三三年）の「概説的序論」に、日本人の国民性に関するものが散見する。

日本人は完全な専制主義のもとに生活しており、したがって何の幸福も満足も享受していない、とふつう想像されていることである。ところが私は彼ら日本人と交際してみて、まったく反対の現象を経験したのである。専制主義はこの国では、ただ名目だけであって、実際には存在しないのである。

日本には、食べものにこと欠くほどの貧乏人は存在しない。また上級者と下級者とのあいだの関係は、ていねいで温和であり、それを見れば、

一般に満足と信頼が行きわたっていることを知ることができよう。

日本では、身分の高い人びと、ことに高級役人たちは、私にとっては、まったく望ましくない存在としか思われぬものである。一生をつまらない儀式にあくせくしてすごしているからである。

一般的にあって、日本人は、ひろい額と長い顔、いくぶん平べったい鼻と小さい口、美しい歯と黒い頭髪をもっており、男女とも頭髪をひょうくに大切にしている（注）三男 沼田次郎 訳注『日本風俗備考』「全二巻」平凡社、昭和53・3。

フィリップ・フランツ・シーボルト（一七九六―一八六六、ヴェルツブルク大で医学をまなび、一八二三年「文政6」出島の医官として来日）は、日本滞在ちゅう長崎郊外の鳴滝村に診療所兼学塾をひらくかたわら、日本の博物、人文資料をあつめた。一八三〇年（天保元）帰国するさいに、国禁の地図をもっていたことが発覚し、国外追放にあつた。帰国後、オランダにおいて、それまでの収集品を使って日本研究をおこない、その成果をつぎつぎと発表し、日欧の文化交流に貢献した。代表的著述としては『日本』（一八三三―一八三四年）がある。

シーボルトは、わが国において、その名が広く知られているが、本国では無名にちかひ。その日本人観に關したものは、断片的なもの以外みかけることはない。その概言は、つぎのようなものである。

かれが商館長とともに、江戸参府をおこない、將軍（家齊）に謁見したのは、一八二六年（文政9）のことである。江戸城内において外国人は、好奇の対象——見せものであつた。シーボルトが案内人の茶坊主に不快感をもつた。頭をそつた、青白い顔色をした坊主衆は、うわべはいんぎんではあるが、じつは尊大にかまえているように思えた。落つきのない目つき、意味ありげなうす笑い、それらはいやらしかった。¹⁶

一方、オランダ人らが会つた高級武士——長崎奉行、外人応接掛、老中、若年寄らは、そのたいどが謹厳であつたため、近づいて親しむことができなかつた。権門の人（官位が高く、権勢がある）より、うちとけることができたのは、下級の日本人（庶民）である。

旅宿（長崎屋）の主人・源右衛門は、ひっそりとさびしい気持でいる旅人らをなぐさめようと、家族をともなつて毎日のようにやつて来た。その数はひごと、ひごとにふえていった（じつさいはオランダ人見物のため）。それは、外国人のぶりようとさみしい夜をなぐさめようとする好意から出ているようであつた。若いオランダ人たちは、源右衛門とともにやつてくる、色どりをきそう日本人女性らを待ちわびるようになった。

日本人の身体的特徴。

わたしはつぎのことに強く注意する。すなわち日本人の髪の色は、黒ではなく、一般にふかい晩褐色で（……）まっ黒な髪に出会うこともあるのを否定しようと思わない。肌の色は小麦色、下層民によくあらわれる。都市住民の肌のいろは、生活形態に応じて変わる。尊貴な宮殿には、しばしばがヨーロッパ婦人のような白い、バラのように紅く、すき透ったほほの色があらわれる。一方、大通りではしばしば見かける浮浪者の肌の色は、赤銅色から土色までさまざまである（中井晶夫他訳『シーボルト『日本』第6巻』雄松堂書店、昭和54・5）。

ドイツのブリグ型帆船「グレタ号」の積荷監督人であったアオグスト・リュードルフに、『日本における八ヶ月』〔一八五七年〕（邦訳名『グレタ号 日本通商記』）があり、このなかでじっさい著者が実見した日本人（庶民、役人）や風俗についての寸評がみられる。

この日本人たちには、好感がもてた。みんな礼儀が正しく、親切であった。容貌は端正で、がんじょうな体格をしていた。しかし、身長は、十人なみ以下であった。蒙古タイプは認められなかった。

日本の役人は、ゆったりとした絹のズボン（袴）をはき、黒い絹の上衣（羽織）をつけていた。両袖と背に、一インチぐらいの白い斑点があり、その中に紋が描いてあった。刀にさわることは、一度も許されなかった。このことに関するかぎり、日本人はひどく神経過敏であった。

日本女性は、一般に健康で、はつらつとした様子をしていた。髪はくろく、中国婦人と同じようなぐあいに高く髷をゆっていた。眼は黒く、ほほは赤い。しかし、ひどく嫌らしい印象をあたえたのは、既婚婦人であった。歯をまっ黒に染め、眉を落していた。

日本人の皮膚の代表色は、明褐色である。しかし、ほとんど白人に近いのを、よく見かけた。女のなかには、しばしば美しい顔をみた。若い娘は、ほんとうにきれいな外貌をもっている。抜けんばかりに白い顔をしている。

日本人は、中国人のばあいと同様に、米と魚類から主要な栄養をとっている。獣の肉をたべることは、うす気味わるいらしい（中村 昶訳『グレタ号 日本通商記』雄松堂出版、昭和59・1）。

ローレンス・オリファント（一八二九〜八八、イギリスの旅行家・著述家）は、使節エルギン伯の私設秘書として中国や日本をおとずれたことがあり、そのときじぶんが見聞したものと既刊の諸書（ザビエル、ケンペル、トゥンベルグなど）を利用して著わしたのが『中国・日本へ特使エルギン伯を派遣した話——一八五七〜一八五九年』〔二巻本〕（一八五九年、一名『エルギン卿遣日使節録』）である。

日本人の性格や風俗習慣についての記述がみられるのは、原本の第二巻——邦訳『エルギン卿遣日使節録』雄松堂書店刊の——第九章である。その要約したものをつきにかかげる。

男性は、その家庭的関係のなかでは、温和、寛容であり、女性に従順、貞淑である。他の諸国より、社会に対して犯す重大犯罪の量が、その人口の割合からいって少ない、とわれわれは確信している。日本人は誇りをもった国民として、詐欺や窃盗、盗賊、強盗などを蔑視し、また嫌悪している。

物ごい、不具、酔漢をみかけない。あばた（天然痘のあと）のある人々の数からいって、日本ではその病気が猛烈に流行しているにちがいない。さらに著者は、ケンペルやザビエル、ストライスの日本人観（国民の性格）をひいて——

（日本人は）よく団結し、親和的で（したしみ合い、仲がよい）、神々は当然崇敬すべく、法律はどうぜん遵守すべく、主君にはどうぜん服従すべく、隣人はどうぜん愛し、尊敬すべく教え込まれていて、いんぎん、懇とく、高潔である（ケンペル）。

日本人はこれまでに発見された他のどこの国民よりも、徳行と廉直（おこないがよく、正直）の点ですぐれている。その性質は、温和で、瞞着（だますこと）を排し、名誉を切望し、それこそ最高のものであるとしている。貧困はかれらの間ではふつうのことで、苦勞して貧困に耐えるけれども、それはけっして不名誉なことではない（ザビエル）。

日本人はよく苦難に耐える国民である。極端なあつさや寒さ、飢えやかわきに耐えることはふしぎなくらいである。それは若いときのきびしい待遇によって生ずるものらしい（ヤン・ヤンスゾーン・ストライプ）¹⁷。

かれらは執念ぶかく、迷信的で、ごうまんで、極端に名誉を固執し、またしばしば名誉を守るため、またその復しゅうのために、残酷しゅんげ

んな手段に訴えることはよく知られている。

かれらはいくらか不まじめで、享楽を好む民族である。肉体的には頑丈だが、その心情は上品で、芸術を愛する人びとである（岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録』雄松堂書店、昭和43・11）。

ラザフォード・オールコック（一八〇九〜九七、軍医からイギリスの外交官となる。日本駐在の総領事、公使をへて中国公使）は、幕末の日本見聞と体験をもとに『大君の都——日本滞在三年記』〔二巻〕（一八六三年）を刊行した。が、同書に散見する日本人評は、かならずしも好ましいものではない。かれは日本人にたいしてはばかることのない批評をおこない、その見方や表現にひじょうに手きびしいものが感じられる。かれは一八五八年（安政5）六月、オランダ使節デ・ウェットとの一行とともに陸路長崎より江戸にむかった。

日本のいなか旅は、かれにとって日本を観察研究するまたとない好機とおもわれた。陸上の旅行は、日本の政治や社会状態をさぐるよき機会であったが、官憲（長崎奉行）は、国内の秩序がみだれていることを理由に、外国人の旅行を危険視し、その計画を阻止しようとした。けれどオールコックは、それを排し強行突破することにした。かれによると、日本の官憲は、日本語を解さない外国人をあざむくきらいがあるという。ささいなこと、わかり切ったことでも、いつでもすべて語らず、告げず、うそをいうと述べている。

日本では、政治・統計・科学の知識をうることがひじょうに困難だという。ひとつには、日本人はじぶんの性格や仕事に直接関係ないことに無知であるからである。が、おもな理由は、外国人をあざむき、誤らせようとする、かれらの根づよい性向のためとしている。外国人がつまらぬことでも、何か知ろうとすると、たちまち日本人は、いっさいの知識を伝えることを拒み、うそを教える。それがかれらの仕事、たのしみであるという（山口光朔訳『大君の都——幕末日本滞在記 中』岩波書店、昭和48・6）。

またオールコックは、日本の商人の狡かつさを指弾している。まず日本の商人の悪徳として、不正直と虚偽（うそ）を提出したという。東方面民のなかで、もっとも不正直であり、もっとも詐欺的なものは、日本の商人だという。開港場である横浜の商人を例としてとりあげると、われわれのこのような判断に一理あることがわかるであろう、と。

たとえば、日本商人の絹の荷の外面はよいとしても、中味は粗悪品である。樟脳はビンの上部だけが純品であり、下部は米つぶが入っている。油槽の下層は水だけである。わが自由なる自治のイギリスの内外にも、数多の不正なる商人はいる。が、日本人のうそは、そのたくみなること

において卓越している、という。

日本役人と交渉するとき、一応そのことばはうそとは思えないが、いかなるときも真（まこと）を日本人のあいだに求めることは不可能である、とのべている（二二八 オールコックの日本観『欧米人の日本観 上』所収、原本は明治40年刊。原書房、昭和48・1）。

ロバート・フォーチュン（一八二二〜八〇、スコットランド生まれの旅行者・植物学者）は、中国・台湾・日本などを訪れ、イギリスへは黄色のバラや日本のアネモネを、中国からインドに茶の木などを移植した。一八六〇年（万延元）夏、日本の植物や博物標本や美術品などを収集する目的で東洋へむかい、同年十月日本（長崎）に到着し、一年あまり日本と清国を中心に、植物を採集するための旅行をした。

日本滞在ちゅう、日本人の日常生活、風俗習慣などにも目をむけ、諸書を参考にしながら、じぶんの見聞談を綴ったのが『江戸と北京——日本と中国の首都への旅行談』（一八六三年（邦訳『幕末日本探訪記 江戸と北京』）である。

長崎滞在中、一八五九年（安政6）三十年ぶりで来日したフォン・シーボルトを、鳴滝なるたきにあるその寓居にたずねた。シーボルトは、博物学に関する日本の研究資料を収集中であった。三十年前にはじめて日本を訪れたとき、サムライ階級に親しみがもてなかった。が、腰に凶器をおびた役人をのぞき、一般の日本人は好きであった。

フォーチュンは、長崎や江戸において、民衆から歓待をうけた。かれらは利益や策略や野心をはなれたすなおな人々であった。邪心のない、正直いぢずな人々であった。日本人の性格に存する著しい特徴は、最下等の社会にいたるまで草木くさきや花を愛し、それらを栽培することに大きなよろこびを感じていることであった。¹⁸⁾

しかし、フォーチュンは、オールコックが体験したとおなじ苦杯を喫しているのである。それは何かというと、日本商人の狡猾（ずる）さ、悪賢いことであった。かれは珍しい植物をすこし買いたいと思って、江戸の団子坂（現・東京都文京区千駄木）にやってきて、そこで何軒か植木屋をひやかした。どこの植木屋に寄っても、そこでみられる鉢植えや地植えのものは、ヨーロッパにないようなめずらしい品種であった。それはかれにとって興味と価値のあるものであった。植木屋のあるじは、かれが選んだ植物を売るとも売らぬともはつきりしなかった。

主人は同行の役人の顔色をうかがっているようであった。売値はふつう主人の判断でままるものであるが、どの植木屋も役人の裁量にまかせているようで、総計をいくらにするか訊ねていた。このときフォーチュンは、

(「こいつらは、ふつうの価格や市価よりも、不当に高く払わせようとしている……)と、おもった。

役人はフォーチュンの購入品の価格や植木屋の名前をかきとめると、それを上司に報告した。

翌日、イギリス公使館に、かれが求めた植物をもって植木屋がやってきた。かれらは植木と引替えに代金をうけとった。役人はうわまえをはねていると思われた。

日本人の復讐心。

復讐心は、日本人のはげしい感情のあらわれであるが、とりわけ高位高官の人たちや、両刀差しの家来の集団は、その意識がきわめてつよい。これらの人々は、いつも無礼や危害に対して、それが真実であろうと想像であろうと、すぐに怒る。

気位がたかく、復讐心のつよい日本人は、かれらの敵がもし外国人であれば、同一人に固執しないことを私たちは知っている(三宅 馨訳『幕末日本探訪記 江戸と北京』講談社、平成9・12)。

ルドルフ・リンドウ(一八二九〜一九一〇、ドイツの外交官・文筆家)は、スイスの東南アジア一帯の市場調査員として、一八五八年(安政5)——一八六一年(文久元)——一八六二年(文久2)——と、幕末の日本を三たび訪れた。おもに長崎や横浜に滞在し、その間に日本の見聞をひろめた。一八六四年日本滞在のさいごには、スイスの駐日領事をつとめた。一八六四年パリのアシエット社から『日本周遊旅行』(『両世界評論』)に記事として発表したものを一冊本としたもの)が刊行された。

同書には、日本人の美点と醜悪な面についての寸評(短いスケッチ)が散見する。——日本人の閉鎖性、人間的特徴、商人の特性などに関するものをひろうとつぎのようになる。

日本人はヨーロッパに近づこうと涙ぐましい努力をしてきた。ヨーロッパは、日本人にとって、科学と光の発祥の地であったのである。ながい世紀にわたって日本人は、ほとんど完全な鎖国状態のなかで、世界の他の国から知られることなく、また無関心に、かたくなに自分たちの島国帝国の領界のそとで起っていることを何一つ見ようともし、知ろうとせず、生きてきた。かれらは尊大な軽べつ感を抱いて自己の中に閉じこもっ

てきたのである。

著者によると、日本人は、――

知的で、活力があり、誇りたかく、とりわけ忍耐づよい人種だという。またかれらは決して礼儀正しさを忘れない。礼儀と作法のおきてを厳格に守り、また世界でもっとも愛想がよく、かつもっともいねいな国民だという。

しかし、くえない人間（ずるがしこく、気がゆるせない者）は、商人だという。日本商人は、何時間、何日でもねばり、ヨーロッパの買い手に打ちかつ。かれらは商談が成功しようと失敗しようが、まったく気にしない。かれらの取引上の理論は、ひじょうに単純なのである。できるだけ高く売ることが眼目なのである（森本英夫訳『スイス領事の見た幕末日本』新人物往来社、昭和61・2）。

フリードリヒ・アルベルト・オイレンブルク（一八一五～八一、プロイセンの外交官）に、『プロイセンの東アジア遠征記』（一八六四年）といった著書があり、このなかに日本の風俗習慣について叙したものがすこしみられる。もちろん、著者は同書を執筆するにさいして、ケンペルその他の諸書を参考にしている。

かれは日本人が、労働階級をふくめ、むつまじく明るい家庭生活を送っていると観、入浴と身体を清潔にすることに意を尽しているという。秋のおわりに、田舎を歩きまわったとき、家のまえで行水してすわっている日本人を目撃している。日本人は裸体でも羞恥心をもたないから、外国人も臆することなく公衆浴場の中に入り、その中をみる事ができる。

友人、隣人同志も、ドイツ人とおなじように、お互い仲よくつきあい、お互い招待しあったり、遊山に出かけたりする。

日本の風俗のなかで、日本人の文化階級と一致しがたいと思われるものは、女性との内縁関係が法的にみとめられていることである。この悪習は、木のコブのようなものである。悪い汁を吸い込んでいるが、木の髄までしみ込んでいない。

女性は婚約したとき、まゆ毛を引きぬき、歯を黒くそめるが、これは花嫁が他の男にもはや美しくみせないためであり、夫には内面的な美しさをもって気に入られようと姿を変えたためとみる。妻に不貞のかすかな疑いがあれば、夫には復しゅうの権利があり、妻が男と二人きりで部屋に

いるのを見つけた場合、夫は妻を殺す権利があるという。

オイレンブルクは、ヒュースケン（アメリカ公使館の通訳）、付そいの役人らと、江戸郊外に出かけたとき、山腹に木造の美しい神社をみた。その屋根をおおっていた素材（ワラとあし）は、ドイツにおいて求めることのできぬものであった（中井晶夫訳『オイレンブルク 日本遠征記 上』雄松堂書店、昭和44・1）。

このプロイセンの東アジア遠征隊の旗艦であったのが、アルコナ号である。同艦の乗組員シュピースは、一八六〇年（万延元）九月八日——雨もようの品川に上陸したとき、出迎えの役人のかっこうを見て笑いをこらえるのに骨がおれた。役人たちはワラの帽子をかぶり、油紙のズボンをはき、ワラでつくった外とうを着ていた。そのすがたは“ヤマアラシ”のようであった。

上陸隊はプロシアの行進曲を奏しながら赤羽根接遇所（使節館）にむかうのだが、下層民がくらすみすぼらしい地区では、裸体の市民やずんぐりした体格の見物人をみた。その中にアバタつらの者がいて、見苦しかった（小沢敏夫訳『シュピースのプロシヤ——日本遠征記』奥川書房、昭和9・1）。

明治七年（一八七四）、アメリカ・フランス・メキシコの天体観測隊が来日し、同年十二月九日——金星の太陽面経過といった珍しい現象を観測した。このときメキシコ隊の隊長であったフランシスコ・ディアス・コバルピアス（一八三三〜八九、天文学者をへて外交官）は、帰国後日本滞在ちゅうの見聞を『一八七四年十二月八日の金星の太陽面経過観測のためのメキシコ天体観測隊日本旅行』（一八七六年）と題して発表した。その抄訳が大垣貴志郎・坂東省次訳『ディアス・コバルピアス 日本旅行記』（雄松堂書店、昭和58・5）である。

著者が横浜到着後、日本の風変りな風俗習慣にふれるのだが、なかでも日本人と中国人の総合的なちがい——両国民の性格のちがい——などの指摘は、なかなかおもしろい。

日本では維新後、西洋の風習（風俗習慣）が入り込むと、何でも受け入れる姿勢をみせた。たとえば、服装（洋装）、洋館や電気や蒸気なども取り入れた。しかし、となりの中国では、外国文明にたいする抵抗や反感がよく、日本とおなじような進展がないという。

服装を例にとると、日本ではどの公務員も洋服を着、洋装が一般大衆にまで浸透しているようにみられる。が、サンフランシスコや中国や日本

でみかけた中国人は、押しなべておなじ服装をし、古くからの習慣を守りつづけている。中国人は既存の慣習からじゅうぶん脱皮できる可能性があるのに、そこから抜け出ようとはしないのである。

進歩的な日本と対照的なのは、因習的な中国であり、日本人と中国人は、この点で大きく異なる。著者は日中両国民の性格のちがいをじゅうぶん指摘できないとしながらも、メキシコでは両国民はおなじ性質、おなじ精神の国だとおもわれているという。

日本人はふつう親切である。ていねいかつ勇敢であり、謙虚さがあり、各種の文化を吸収する柔軟性をそなえている。が、中国人にはそのような資質は備わっていないとみている。

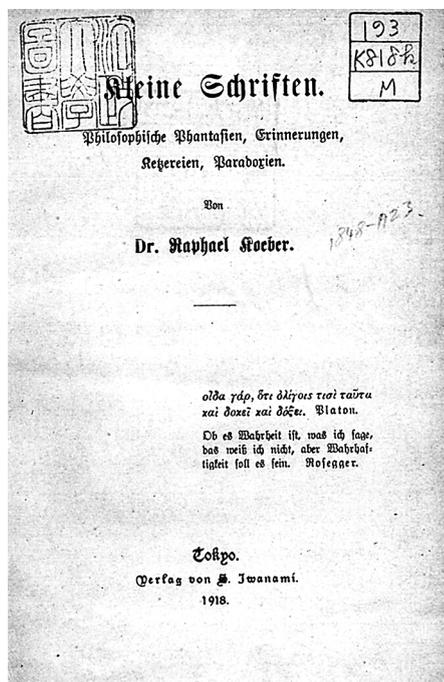
著者のみるところ、日本人は生来儀式ばった民族であり、極度なほどいんぎんな民族なのである。かれらはつつしみ深く、従順であり、秩序正しい民族なのである。

エメ・アンベール（一八一九〜一九〇〇、スイスの寄宿学校・高校の教師をへて公務員となり、遣日使節団長となる。のち再び教職にもどる）の『絵入りの日本』〔二巻本〕（一八七六年）は、日本の風俗習慣に関して叙述した大著である。著者は幕末の日本をおとずれ、十八ヶ月滞在した。一八六二年（文久3）二月、江戸において修好通商条約をむすんだ。が、それまで幕府ののらりくらり政策の結果、焦燥の日々をすごさねばならなかった。しかし、それが日本をつぶさに観察する機会となった。かれは横浜や江戸でくらし、そのときの見聞を諸書を参考にしながらまとめたのが本書である。

日本人の肉種的な特徴を描き、つぎのようについて。

日本人の身長は中ぐらいで、ゲルマン民族よりかなりひくい。日本人の体は、均整がとれていないのではないか。一般的に頭が大きく、肩のなかにややめりこんでいる。胸はひろく、胴長である。脚はやせていて、みじかい。足は小さく、手は細い。顔は正面からみると、卵形というより、むしろ四角ばった形をしている。

日本人の頭髮は、例外なくぬめらかで密生し、黒たん色をしている。皮膚の色は、社会階級の相違によって異なり、ジャワ島内陸の住民の赤銅色、浅ぐろい色、青白い色、南ヨーロッパの人びとのように陽焼けしたものである。が、大多数は、オリーブ色のまさった褐色であり、シナ人



ラファエル・ケーベルの『小品集』（大正7）

の黄色とはぜったいに違っている。

女性の顔の色は、男よりずっと白く、上流社会や有産階級にも、ぬけるほど色白の女性がたくさんいる。

著者が、日本人の風習を観察して疑問を抱いたのは、日本民族はどこから来たかという点であった。日本人や通訳にいろいろ聞いてみても、得られる答は、「逃げことば」だけであった。それは無知のせいか、あるいは神聖な民族的習俗を、外国人におしえたくないことにその原因があるようであった（高橋邦太郎訳『アンペール 幕末日本図絵 上』雄松堂書店、昭和44・7）。

ラファエル・ケーベル（一八四八〜一九二三、ロシア生まれの哲学者。東大の哲学教授をへて日本で没した）に、『Kleine Schriften (Verlag von Iwanami, 1918)』という随筆集があり、これは刊行の翌年日本語に訳された。深田康算 久保勉 共訳『ケーベル 博士 小品集』（岩波書店、大正8・6）がそれである。この中の「第三 問と答」「第四 序文 演説 書簡」は、日本人についての寸評や写生文である。すなわち著者の日本人観をのべたものがある。

ケーベルは東大で二十有五年古典語や西洋哲学を講じた人物であるが、かれはじぶんのエッセイにおいて忌憚ない批評をおこなっている。かれは低い、ひらべったい鼻をした、純モンゴル人種的な、日本人ががいがいして好きであった。かれのみるところ、日本人は、聡明で快活であり、人なつこく、思いやりがあり、同時に抜目のない人間であった。

かれらはよく外国人や同胞をだましたり、欺くことがあっても、それはたいていささいなことであり、それを隠ぺいしたり、弁解しようとすることはきわめて少ない。だからかれらに対して、まじめに立腹することは、じっさいできないのである。日本人はきわめて鋭い、かつまちがいのない目をもって欧米人を判断する。

ケーベルは、日本人を三つのグループに分けた。

第一種……愛すべき者。 第二種……笑いをさそう者。

第三種……軽べつすべき者。

第三種の蔑視すべき人間は、成功主義者、背信者、文士、偽君主、じょう舌家などである。これらの連中は、うすぎたない小外とうを着て、風のまにまに向きをかえる。きょうはフランス人を気取るかと思ったら、明日はイギリス人、アメリカ人、ロシア人のふりをする。

ケーベルが日本において、いちばん不可解であったのは、空虚にして醜悪（みにくく、不快）、死ぬほど退屈な儀式——大宴会——教授会——儀式ばった会合などを重視することであった。じっさいそれに参加した者は、みずから退屈を感じ、あくびをしていた。たいそう笑止に思われたのは、酷暑の時期におこなわれる専門に関する試験に、とてもパスすることが覚つかないような教師が、単なる用語や名前をもとめず、事柄に関する知識を学生に試問することであった。

大学の奇怪人。

こうした教師は、毎年古いノートをくり返し、講堂において駄じゃれや自慢話をしている。かれらを醜くしているものは、“虚栄心（みえ）”である。西洋の学術や芸術をすこしばかりかじった自称“学者”が、急に偉くなったような錯覚にとらわれ、大それたことを企てる。

ケーベルによると、ある者は初歩の語学力や歴史的な知識もないのに、じぶんの能力のおよばないような研究を企てる。もう一人は、人から大著を書いたといわれたいが由に、大部の書をあらわす。第三の者は、“会長”の名をえたいために、誇大な名称の協会や学会を創設する。またじぶんの名を会員名簿にのせてもらいたいために、外国の学会に加入する。第四の者は、みずから読んだこともない書物を（その語を理解できないため）、その応接間に飾っておく。

これらはみなじぶんをよりよく見せるための見栄、純然たる虚栄心のあらわれであり、ケーベルからみるとこっけい千万なことであった。

ケーベルのみるところ、日本の学界は変なところであった。教師の著わす書物ばかりか、学生の卒論なども、その“厚さ”で評価されるのである。教師は大部な本であればあるほど、さらに外国語や引用句が多ければ多いほど、“学術的”だとみずから信じ、読者もまた著者が博学だと信ずるのである。

海外留学から帰国したばかりの若い教授の講義題目の内容をみると、うぬぼれと欺まんがじぶんのために建てた記念碑（自画自讃の意——引用者）にほかならなかった。つまりこの教師が発表した講義内容は、銜気（げんき）（じぶんにすぐれた知識や才能があることをわざと見せつける）に満ち

たものであった。

ケーベルは、切れ切れの日本語しか話せなかったが、教員室で身ぶりと目つきで理解できる人士じんしが何人かいた。かれらはすこし古い時代の学者であり、単純な、謙虚な、高雅なる人物であった。ケーベルが敬愛したのは、

根本通明みちあき（一八二二〜一九〇六、もと秋田藩士。幕末・明治前期の儒学者。のち東大教授）

浜尾 新あた（一八四九〜一九二五、もと豊岡藩士。明治期の教育学者。のち東大総長）

らであった。この二人は、学者ぶらぬ人であり、日本の精神と性格のまことの代表者であった。

ケーベルがもっとも好んだ人間は、単純な——善良な——落ちついた教養人であった。生活ぶりや考え方に古風アルトモードイッシュなところがある人であった。きれいな人間は、落ちつきのない、移り気の、神経をわずらったデカダン派。頭がかたくユーモアを解さない人間、うぬぼれの強い人間であった。女性では、いわゆる貴婦人——サロンの淑女グレイズとよばれている「化粧した猿」であった。

かれはまた卒論（帝大生が第三学年のとき提出する「論文」エッセイ）の制度に疑問をもち、ときの文科大学長に提言しようとしたようだ。ケーベルがみるところ、この種の「研究」アルバイトは、まったく価値のないものであった。なぜなら、それは学生の知識、その精神的成長を証明するものでないからである。

学生の論文は、諸書のうわつらウワツラを編纂したものにすぎないという。学生はそれらの著作をよんだのでも、じゅうぶん自分の頭で考察したのもなく、ただ人のものを没批評的に利用し、いかげんに抜粋したものであるという。いやむしろ書き写したものである。しかも往々にして当人は、じぶんジブンが書き写したものの意味すらわかっていない。

要するにじぶんジブンで設定した問題を明らかにするため、じゅうぶん調べ、考えずして書いた「つぎはぎ論文」は、だめだというのであろう。ケーベルは論文制度を廃止し、従来の試験制度（筆記か、本人の希望によって口頭による）を復活するようにしている。ことに口頭試験は、大いに価値があるという。それは「法廷風」でなく、したしい会話をもっておこなうのがよいという。

*

つきにかかげるものは、いちどもわが国を訪れず、既刊の日本報告や視察記を参考資料として、日本および日本人評をおこなった者の著述である。それは実地に即し、見分して書いたものではないにしても、中にはグスマンの『東方伝道史』（一六〇一年）のように、日本滞在の経験者が書いたものと見まちがうほどの真正の著書もある。二次資料によるこういった著述は、いちがいに捨て切れぬものである。

フワン・ゴンサーレス・デ・メンドーサ（一五四五～一六一八、スペインの軍人。のちアウグスティノ修道会に入る。中国へ使節として赴くためメキシコに渡ったが、現地当局の反対にあいヨーロッパに戻った。晩年、コロンビアのカウカ地方の司祭となる）は、メキシコ滞在中、中国へいったアウグスティノ会士の旅行記や資料などを蒐集し、それらに基づいて『シナ大王国誌』（一五八五「天文13」、ローマ刊）を著わした。

メンドーサは、日本を訪れたことはいちどもなかったが、日本国とその国民について二次資料にもとずいて報告している。

ハボン（日本）の島々は、チナ（中国）大陸から三百レグア（約一七〇〇キロ）へだたった位置にある。ハボン諸島へは、ヌエバ・エスパニャ（メキシコ）経由で行けば、ひじょうにかんたんに行ける。なぜなら、航海は他よりも快適かつ安全であり、距離もみじかいからである。その海域を航行する水先案内人の計算によると、一七五〇レグア（約九七〇〇キロ）の距離である。これはポルトガル人が航海に要する距離（アフリカ南端経由）の半分にも達しない。

島々には大勢の人間が定住している。住民の容貌や体つきは、チナ人とあまり異ならないが、かれらほど人柄は上品でない。島のすべてに大勢の領主^{レゾ}、豪族がいる。ナポナガ（信長）王は、家臣の数と富力からいって、諸島ちゅうもつとも強力な君主である。

イエズス会の神父たちのすぐれた説教と手本のおかげで、ハボン人は東インドの住民より立派なキリスト教徒になっている。この諸島の住民は、体格がりっぱで均整がとれている。チナ人ほどではないが、人あたりがよい。あまり雑多な食物をとらぬから、ひじょうに健康であり、長生きする。医者を見とめず、かんたんな薬を用い治療するだけである（長南実 矢沢利彦 共訳『シナ大王国誌』第2部 第3巻 第14章、岩波書店、昭和48・2）。

ヤン・ハイエン・ファン・リンスホーテン（一五六三～一六一一、オランダの探検家、商人、東洋事情研究家）は、『東方案内記』（一五九六年、一名『ポルトガル領東インド水路記』）を著わした。かれは来日の経験はなく、日本に関して書いたものは、メンドーサの『シナ大王国誌』、マフ

エイの『インド布教史』、イエズス会士の書簡選集などを資料としたものである。

日本島（＝日本国）は、多くの島からなっている。いくつかの小さな湾、川によって分けへだてられていて、一つの大きな国である。ポルトガル人がマカウ（マカオ）から北東へ航行して三百マイルのみちのりである。かれらが取引をする港は、長崎であり、ほかにも取引をする場所がある。

日本は寒い国であり、多くの雨や雪や水を有する。国土は、場所によって山が多く、不毛である。国民は米を常食とし、野生の獲物をのぞくと肉をたべない。家畜の肉をたべることがをいやがる。牛乳は色が白くても動物の血液であり、それをひどくきらう。

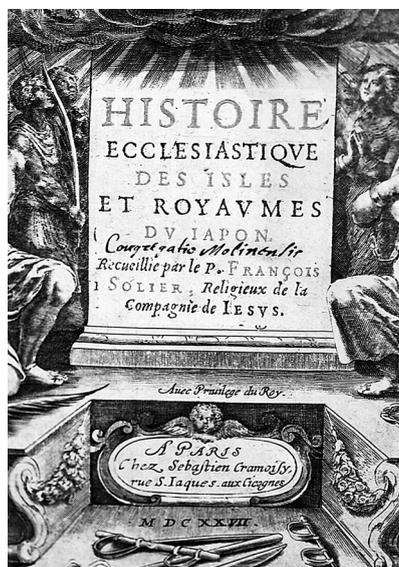
日本人は俊敏であり、物事をすばやく学びとる。この国の民衆は、地方人をふくめて優雅な礼儀作法に富んでいる。かれらは何事においても忍耐つよい。幼少から飢え、寒さ、あらゆる労働を耐えしのぶよう教え込まれている（第二十六章 ヤパン島について、岩生成一 洪沢元則 中村孝志 共訳『リンスホーテン 東方案内記』所収、岩波書店、昭和43・9）。

ルイス・デ・グスマン（一五四三～一六〇五、アルカラ大学に在学中にイエズス会に入り、のち司祭に叙せられた）は、来日しなかった。が、ローマへむかう九州三侯の遣欧使節とベルモンテの学林で会い、歓待した。同人が著わした『東方伝道史』（一六〇一年）は、東インド（東南アジア一带）と日本における初期のイエズス会の伝道史について綴ったものだが、史実の正確な点では、フロイスのものと双壁である。

日本の土地は、数多の島からなり、その島々はたがい個立し、大海に出没している。東インドから日本への直航路は、マラッカを通り、琉球諸島へむかうのだが、ふつうマラッカよりシナのマカオ島へのコースをとる。

日本国は山が多く、ヨーロッパのように不毛の土地ではない。ときどき降る雨のおかげで、じゅうぶんな食糧と果実がえられる。日本人の常食である米を多く産する。日本には帝王が一名おり、それを王または内裏とよび、これを君主として臣従している。京都ミヤコに日本の政庁がある。

日本人の風習は、他国民のそれと趣を異にし、独特なものである。わが国では人にあいさつするとき脱帽するが、かれらは履きものをぬぐ。人をむかえるときはすわり、立ってむかえることは失礼にあたる。かれらの礼儀作法はいいねいである。一杯の水をのむとき、人と食事をしたり、



フランソワ・ソリエの『日本王国および諸島の教会史』(1627年)。
明治大学附属図書館 貴重書

贈物をするとき、また伝言をつたえるとき、数えきれぬほどあいさつをする。

かれらは牛乳やそれを材料として作ったものをひじょうにきらう。牛乳は山羊の血が変色したものであり、生血をのむ人に対するように、牛乳をのむ者をきらう。かれらの常食は、米や猟鳥である。

日本人は、東方にあるどんな国民よりも高尚であり、施政や理論的方面においてすぐれている。説教をきき、疑問点が氷解してはじめて入信する。かれらはひじょうに名誉を重んじる。家臣や家婢は、主人をうやまい、これに服従する。友人はお互い信じあい、ことばを守り、礼儀正しい。財産をうしない、貧

乏になっても、裕富であったときに人から尊敬される。日本人にとって貧乏は不名誉ではない(第一章 日本の土地、地勢……、第二章

日本人特有の風俗、第三章 日本人の性質および特有性)、ルイス・デ・グスマン著 『グス』『東方伝道史 上巻』所収、天理時報社、昭和19・1)。

新井トシ訳

フランソワ・ソリエ François Solier (一六一八〜九二、フランスのイエズス会士)が編んだ *Histoire Ecclesiastique des Isles et Royumes du Japon*, Sebastien Cramoisy, Paris, 1627 (『日本の各王国および諸島の教会史』セバステイアン・クラムワジ社、一六二七年)の *Libre Premier* (第一巻)に、日本の地理、風土、風俗習慣などに関する記事がたくさんみられる。この中からひろった章句が、つきにかかげるものである。

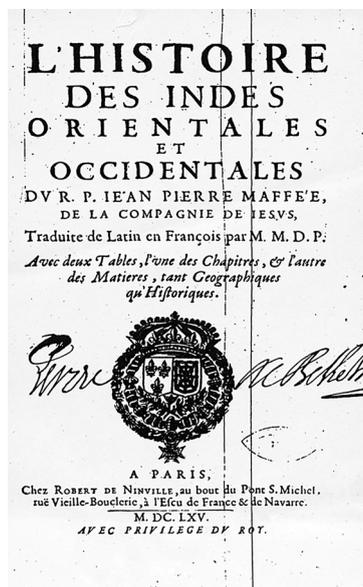
ふつう日本の名をもつすべての島は、三つの国に分けられる。最初にしてもっとも有名な島は、北方から始まるが、日本と呼ばれている。

日本の名をもつ地域は、とくに日本とも呼ばれている (Chap. Premier, p.2)。

日本は 新 スペイン (メキシコ)の意 とおなじ気候である。空気はひじょうに健康によい。(……)そこで暮らしている人々は、長生きである。ひんばんに地震が起るため、大部分の建物は、木だけでできており、板やワラでおおわれている。けれど使いやすく、清潔である (Chap.

Second, p.7)。

大方の日本人は、分別があり、繊細であり、おだやかである。また礼儀正しく、すなおである。記憶に富み、とかく理性のいうなりになる。イ



ジョバンニ・ピエトロ・マフェの仏語『東西インド史』(1665年)。

エズス会士がはじめて福音を説いたときの経験がしめしているように。

職人や農民といった細民は、ヨーロッパの大部分の国民がそうであるように、粗野でないし、がさつでもない。

日本人の皮膚の色は、白色というよりオリブ色である。インド人とくらべると白いという者もいるが (Chap. III, p.9)

ジョバンニ・ピエトロ・マフェ Giovanni Pietro Maffei (一五三三?～一六〇三) イタリアのイエズス会修道士)は、ラテン語で『インド史』十六卷 *Historiarum Indicarum Libri XVI*. ……Colonia (Köln), 1593 を著わした。ここでいう「インド」とはポルトガル領の東インド(インド、インドシナ半島・マライ諸島などをふくむ東南アジア一帯の呼称)のことであり、日本もその中に入っていた。同書の仏訳が *L'Histoire des Indes Orientales et Occidentales* de R. P. Jean Pierre Maffei. Traduite de Latin en François par M. M. D. P., Chez Robert de Nanville, Paris, 1665 (『東西インド史』M・M・D・P訳、ローベル・ドゥ・ナンヴィル社、一六六五年)である。

マフェはイタリア北部のベルガモ共和国で生まれた。弁舌にすぐれ、長じてイエズス会士となった。著作が五、六点ある。が、その名が知られるようになったのは、くだんの浩かな『インド史』やイグナチオ・デ・ロヨラ(一四九一?～一五六六)の伝記—*De vita et moribus B. P. Ignati Loioae, gyi Societatem Iesv fundavit Apud Maternum Cholinum, 1585* (『イグナチオ・デ・ロヨラの生と死—イエズス会の創立者』ケルン版、一五八五年)を上梓してからである。

いま仏訳『東西インド史』(一六六五年)をのぞいてみると、日本観——日本人の風俗習慣——布教のようすなどを記した記事をみいだすことができる。日本に関する地誌的、歴史的記述——ことに日本の習俗や国民性の記述がみられるのは、第十二巻のうしろあたりから第十六巻までである。

いくつかある島の中で主なる島は三つある。それらの島は、潮の満干によって、他の島と隔てられている。いちばん大きな、そして主要な島は、五十三の王国または国にわけられている (*Livre Dovesme, p.135*)。

日本人はひざを床につけ、すわって食事をとる。かれらは中国人ほどきれいな好きでない。小さなのみを二本もち、それを使ってじつにたくみに肉をとるのだが、落っこすようなことはない。また指を使う必要もない。ここに海のそばで暮らす貧しい者は、草や米や魚だけを食べて生きている (Livre Dovesme, p.137)。

ふつう国民は、才気があり、用心ぶかく、教養が高い。そして判断するかぎりでは、従順さや記憶力の点で東洋人ばかりかスペイン人、イタリヤ人をも凌駕している。子どもたちやもっとも粗野な連中を、ためしてみればわかることである。なぜなら、ほぼ市民の生来のいんぎんさに等しいものに加えて、かれらは才気煥発であり、いなか者の粗野を感じさせないからである。かれらはわが同胞よりもはるかにやすやすとローマ人の文字 (ラテン語——引用者) や学芸をまなぶ。貧しいからといってひとから軽べつされたり、非難されることはない (Livre Dovesme, p.142)。

アルノルドゥス・モンタヌス (一六二五〜八三、オランダの宣教師) は、世界各地の地理、歴史書を著わした。日本については、十六世紀末にわが国においてキリスト教の布教に従事したポルトガルやスペインの宣教師の報告書 (書簡) や十七世紀のはじめより五十年間に数回、来日した東インド会社のオランダ使節の見聞談をもとにオランダ語で書いたのが、『アトラスヤポネンシス日本図録』 (一六六九年) (一名『モンタヌス日本誌』) である。同書が公刊された翌年以後、英・独・仏の訳本が刊行された。

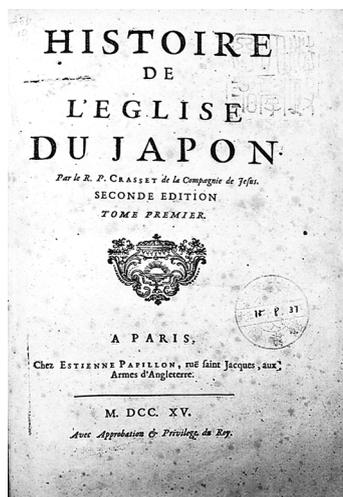
日本人の体格や習俗に関する記事をかいつまんで記すと、つぎのようになる。

日本人は身長がたかく、体は頑丈であり、夜警その他のしごとに耐えうる。十二歳から六十歳まで、軍事 (徴兵) に関係する。かれらはさまざまの艱苦 (辛苦) にたいして忍耐力を働かせる。習慣的にきたえられているので、飢餓・寒暑・節約・夜警などをものともしない。

料理は上手であり、味はよい。中国人のように二本のはしを用いる。それをたくみに用い、指をよごさない。食堂に入ると、清潔をたつとび、くつをぬぐ。海岸に住む貧しい者は、食物に窮したとき、米や魚や塩だけを食する。

われわれはあいさつするとき帽子をとるが、日本人はクツをぬぎ、足をあらわにする。われわれは年長者や友人に敬意を表するために、告別のことをもってあいさつしたり、起立したりする。が、かれらは土下座して敬意を表し、相手のことをまつ。

だれもが国王に服従する。国王は最高位である。統治者は富力によらず、人数によって統治する (和田万吉訳『モンタヌス日本誌』へいじ丙午出版社、



ジャン・クラッセの『日本教会史』(1715年)。法政大学附属図書館 貴重書

大正14・3。

ジャン・クラッセ(一六一八〜九二、フランス生れのイエズス会の宣教師)は、ひろく諸宣教師の紀行や記録、年報などに目をおし著わしたのが『日本教会史』(一七一五年、一名『日本西教史』)である。この本の翻訳は、明治十年代に早くも太政官本局から刊行された。が、誤訳が多いため、こんにち史料としての使命をおえていない。風俗に関するものが、日本国記事(第一章〜第五章)である。いまこの中から要所を抜きだすと、つぎのようになる。

いわゆるジャポン(日本)という国は、数個の島からなり、アジア州の極東にある。北緯三、四十度のあいだに位置する。

もし住民の健康をもって一国の空気の清濁を知るとすれば、日本は地球第一といっても過言ではない。なぜなら、この国は疾病(病氣)つねにすくなく、国民は長寿をたもっているからである。夏の炎熱は、焼くがごとき状態であるが、国のまわりが海であり、また国内に大きな川が流れているので、気温は調和される。冬になると、寒さはきびしく、雪がたくさん降る。が、山岳雪は土地をうるおしている。

ふつう五月になると、麦が熟し、九月には米を刈り入れる。米は国民の常食である。日本人は牛やブタや羊の肉をたべないし、牛乳をのむこともしない。牛乳をのむことは、生血を吸うのとおなじことである。牛馬はひじょうに多い。牛は農事とうに用い、馬は戦場で用いるだけである。

日本人の多くは、強くて健康であり、戦闘にたえうる。その容貌は褐色であるが、中国人は白人とよんでいる。日本人の背丈は大きく、精神は活発である。ふつう体格は中位であるが、すばしこい。かれらはじつに忍耐づよい。飢えや寒さやあつさに屈することなく、しごとにはげむ。かれらは困苦に堪えうる美質をもっている。

日本人と何らかの商取引をおこなう外国人はみな、かれらに粗暴なふるまいなく、じつに正直なうえ、ていねいなることをみとめている(R. P. Crassey: Histoire de l'Église du Japon, tome Premier, Estienne Papillon, Paris, 1715, p.6)。

かれらの風俗について書いている者は、五百年來、われわれが知るに至ったあら

ゆる国民のなかで、これほど美点に富み、かつおだやかで親切な性向をもつものはいない、と (R. P. Crasset, p.7)。

ザビエルが来日し、はじめて日本人に接したとき、かれらが義理(道理)にするどいことに驚いている。日本人はザビエルの話によく耳をかたむけ、しかるのちすぐ質問し、いったん理解したら、かならずこれを実行する。

この国の風習は、他の国々のものと異なる。わが国では人にあいさつをするときは帽子をとり、貴人が来たときは起立する。が、日本人はすわったま、敬礼する。

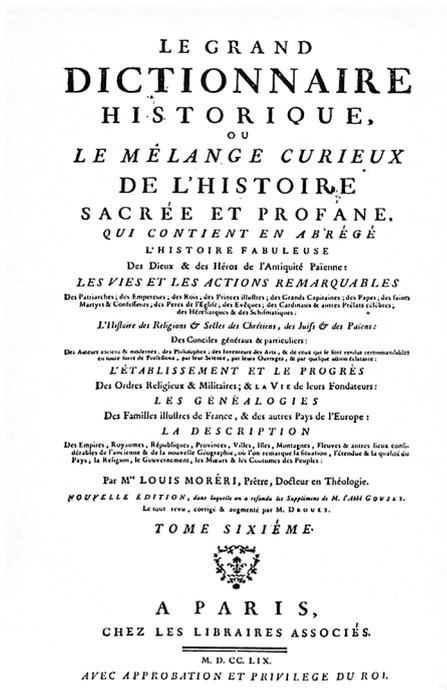
わが国では牛や羊の肉を滋養物としてよこんで食するが、日本人はこれらを忌みきらい、犬や馬の肉と同一視している。わが国では人が馬にまたがるときは、左から乗るが、日本人は右から乗る(明治十一年大政官翻訳『日本西教史 上』時事彙存社翻刻発行、大正2・12)。

ピエール・ベール(一六四七〜一七〇六、フランスの哲学者、批評家、デカルト哲学の継承者)は、急進的自由主義ゆえに迫害をうけ、オランダに移り、『歴史的批判的辞典』(一六九六年)を執筆した。この中に日本人があがめる神々やキリスト教のことが出てくる。かれがこの中で日本の項目を書くにあたって利用した文献は、ルイ・モレリ(一六四三〜一八〇〇)の『歴史大辞典』(一七五九年)、ソリエの『日本宗教史』、クラッセの『日本教会史』、ポッセヴィノの『選集』⁽¹⁹⁾などであった。ベールはこの中で独自の視点から日本宗教を批判した。その摘要はつぎのようなものである。

日本は、シナの東にあり、多くの島に分かれた大きな国である。日本王国の身分は、聖職者と世俗人の二つにわかれている。前者はボンズからなり、後者は貴族と民衆からなる。日本人は二種類の神をもっている。第一は悪魔たちで、いろいろな形のもとでおがむ。それは悪魔から益をうるためではなく、害をうけるのを恐れるからである。第二は国王、征服者、学者たちであり、かれらを神々の列にくわえている。

キリスト教は、フランシスコ・ザビエルやその他多くの宣教師が日本人に伝えたものだが、最大の障害はボンズが生じさせたものである。それは論争や議論によらず、俗権にたより、国王や民衆を駆りたて、古来の宗教を護持させ、新宗教の信者を迫害させることによってそうした。

キリスト教徒を片づけなにかぎり、日本人は古来の統治も祭祀も維持できなかった(野沢 協訳『ピエール・ベール著作集 第四巻 歴史批評 辞典Ⅱ(E-I-O)』所収、法政大学出版社、昭和59・11)。



ルイ・モレリの『歴史大事典——名神聖かつ不敬な物語の珍文集』（1759年）。

日本ジャポンまたはジャパンは、アジアでもっとも豊かな、もっとも強大な王国のひとつである。この国はシナの東に位置する群島に包含されている。緯度は三〇度から四〇度、経度は一七一度から一八八度である。一五四二年（天文11）ポルトガル人はたまたまはじめてこの国を発見した。サツマの王国のカゴシマカゴシマの港に嵐によって吹き流されたときである。サツマは下の島しも（九州の意——引用者）にある（Japan ou Japan, p.192）。

などである（一九二〜一九五頁）。

日本におけるキリスト教の発展

日本の宗教

日本の政治

日本の衣装や風俗

この国の特性

ジャポンまたはジャパン（日本概説のようなもの）

同辞典における日本の項目は、——

ピエール・ベールが日本の宗教を論じるとき利用した資料の一つに、ルイ・モレリ Louis Moréri（一六四三〜一八〇）フランスのカトリック司祭、神学者）の *Le Grand Dictionnaire Historique, ou le Mélange curieux de l'histoire sacrée et profane*, Chez les Libraires Associés, Paris, 1759（『歴史大辞典——一名神聖かつ不敬な物語の珍文集』アソスイエ社、一七五九年）があった。

つぎに日本記事の概要をしめすと、つぎようになる。

日本は南東から北西に沿って横たわっている。だから幅はひじょうにふぞろいである。ふつうこの国は、ひじょうにでこぼこした三つの部分に分けられる。なぜなら数多くの島のなかで、他よりもはるかに大きな島が三つあるからである。他のすべての島は、いわば属領のように思える。日本人の体格は大きくない。が、顔立ちはひじょうによい。かれらは他の東洋人ほど皮膚の色がオリーブがかっていない。日本女性は、美人の評判がたかい。日本人にとって、白は喪の色なのである。

日本人は名誉の原理によって行動する。かれらは正直であり、誠実である。よき友であり、おどろくほどおせっかいであり、寛大で、親切である。富を軽べつする。かれらは真理を愛し、いささかも人をあざむかない。

しかし、日本人は高慢であり、活動的である。復しゅう心がつよく、自尊心に富み、外国人をさげすむ (Costumes et mœurs des Japonais, p.193)。

モンテスキュー (一六八九〜一七五五、フランスの政治思想家、歴史家) は、その著作『法の精神』(一七四八年) のなかで、すこし日本に言及した。かれがみるところ、日本は専制政治の最悪な国家であり、刑罰はひじょうにきびしく、ほとんどすべての犯罪は死刑をもって罰せられるという。日本皇帝 (将軍) にたいする不服従、役人にウソをつく者、バクチに金をかける者は死刑になるとしている。

かれは日本の専制政体と苛酷な刑罰 (死刑) をあしざまにいい、それは専制主義そのものを腐敗せしめるといふ (第十三章 日本の法の無力、宮沢俊義訳『法の精神 上巻』所収、岩波書店、昭和3・1)。

フランソワ・マリ・アルエ・ヴォルテール (一六九四〜一七七八、フランスの史家、啓蒙思想家) の『哲学辞典』(一七六四年) のなかに、「日本人の教理問答」といった項目があるが、これはヘンリー八世 (一五〇九〜四七、イギリス王) が、アラゴンのカテリーナとの離婚問題で教皇庁と対立し、ひそかにアンヌ・ボレインと結婚したことで、教皇クレメンスとの争いがさらに激化した事件を、パロデー風を描いたものである。

日本人をひっぱり出し、インド人とへんちくりんな対話をさせている。

この対話に出てくる人物は、それぞれつぎのように置き換えないと、この記事は何のことかわからない。

日本人 → イギリス人 日本 → イギリス 料理人 → 祭司 ダライ・ラマ → 教皇

皇帝→ヘンリー八世

むかしの日本人は料理ができなかった。ダライ・ラマ（チベットに君臨したラマ教の教主）に国をまかせていた。日本人の飲物や食物をかって決めていたのは、ダライ・ラマであった。日本へときどきラマ僧を派遣し、貢物をした。その返礼に、前の二本の指と親指で示された庇護の印をもらったという話は本当ですか。

インド人……あ、それ以上の真実はありません。

日本人……われわれの島の偉大な料理人である神主の地位は、すべてラマ僧によって与えられたものです。わが国の平信徒は、各家ごとに年一オンスの銀をこのチベットの偉大な料理人におさめ、その代償にまずい料理を小皿にもらっていました。

わが国の皇帝は、ひとりの女性のことダライ・ラマとけんかしました。この事件でいちばん役立ったのは神主（ポークスピ
ー||主教）でした。ダライ・ラマには、変なくせがあって、じぶんはいつも正しいと思っていました。内裏さま（天皇）や神主
らも、ときにじぶんたちは正しいと思うことができました。が、ダライ・ラマはかれらの主張を理不尽と考えました。

神主らはひきさがらず、ダライ・ラマと訣別してしまいました。

インド人……なるほど。その後、あなた方はしあわせで平和だったのでしょね。

日本人……とんでもない。われわれは二世紀ほど迫害しあい、引きさきあい、破滅しあったのです。

注・高橋安光訳『ポルテール 哲学辞典』一七六四年、法政大学出版社、昭和63・7。

フレデリック・エドワール・フレシネ Frédéric Edouard Fraissinet（一八一七〜八三、ドイツ文化研究家、翻訳者、学術雑誌の編集者）には、
Le Japon, histoire et description: moeurs, coutumes et religion, Arthus Bertrand, Paris, 1864 [二巻本]（『日本 歴史と叙景―風俗・習慣および宗
教』アルチュ・ベルトラン社、一八六四年）といった大著がある。著者は来日したことはなく、それまでヨーロッパで刊行された日本に関する諸
書を参照しつつ、同書を著わしたようである。

その日本人観についての描写は、つぎのようなものである。

大胆なほど勇敢な日本人は、頭の命令に盲目的に服従せねばならないと思っている。かれらはその命令には受け身であり、すぐに従う。

日本人の衣服はひじょうに質素であり、大部分のアジア民族にみられるように、けばけばしさの逆を行っている (Tome second, Chapitre XIII, p.223)。

中国人が色が白いとよんだ住民は、オリブ色をしているが、たいていきわめて壮健であり、すらりとしていて、軍事教練にうってつけである。背が高い者は、足どりが堂々としているが、ふつうの背丈の者は、それほどでもない。

どの階級の者も、みごとな忍耐力をもって、飢え、かわき、きびしい気候、夜なべ、さまざまの苦勞、生活において起りうる不都合などに耐えることができる。日本人と何か関わりがある外国人は、かれらに粗野なところが無いことを認めている。またかれら自身きわめて礼儀正しいこともみとめている。

いずこにおいても同じであろうが、日本人の中にも愚かな者、分別のない者がいる。しかし、大方の日本人は、才気があり、器用であり、好奇心がつよく、生来の明敏さにめぐまれ、道理にしたがう。聖フランシスコ・ザビエルは、その書簡において、日本人についてこのような贊辞を寄せている (Tome second, Chapitre XIII, p.225)。

一 日本人がみた異邦人 (白人と黒人)

戦前だといまどちがって日本人が外国人をみかけたり、かれらと接触することはほとんどなかったといつてよい。ちょっと大きな町には、宣教師や外国人教師がおればよい方で、戦後進駐軍 (占領軍) がいる基地以外、外国人をみることはまずなかった。田舎ではたまに進駐軍のジープやトラックが通り、チューインガム、チョコレート、タバコなどをばらまいていった。日本人はそれに殺到した。

わが国において、日本人がはじめて西洋人 (ポルトガル人) に接したのは十六世紀中ごろであり、種ヶ島においてであった。その後、キリスト教の伝道師や貿易商人らがやってくるようになると、平戸・長崎・堺などが渡来の要所となった。だからこれらの港町でくらす町人、商人、武士らは、ほかにくらべて西洋人と接触する機会が多かったといえる。

古来日本人は外国人をどのように呼んできたのか。それをあらわす語につきのようなものがある。

唐人……唐の人。中国人、転じて外国人。

蕃夷……えびす（未開の人民）。野蛮人。

南蛮または南蛮人……南方の未開人。

南洋諸島をへて渡来した

西洋人（ポルトガル人、スペイン人）。

異人または異国人……人種のちがう人。外人。

毛唐……外人。欧米人をいやしめていう言葉。

番（＝蕃、蛮）……えびす。外国人。

注・むかし中国において、“夷”は東方、

“狄”は北方の未開人をいみした。

紅毛または紅毛人……江戸時代、オランダ人の称。

転じて西洋人の意。

このうち“南蛮”または“南蛮人”という語は、慶長八、九年（一六〇三、一六〇四）ごろすでに、日本語としてあったようである。長崎版『日・ポ辞典』⁽²⁰⁾ (Vocabulario da Lingoa de Iapam, Nangasagui, Anno M. D. CIII.) の一七六頁に――

Nanban. Minamino yebisu.

（南蛮。南のえびす）

とある。

西洋人がはじめて日本人をみて奇異の感に打たれたとしたら、日本人も相手を見て奇怪におもったことであろう。

お互いそのときの人物描写——容姿の写生文をあまり残していない。

天文十二年（一五四三）八月——大隅国種子島（おすみのかたながしま）に異国船（ジャンク）が漂着したとき、日本人は船中の乗組員のなかに西洋人がいることを知ったが、相手の顔かたち、みなりの記録すら残さなかった。江戸時代になり、そのときの西洋人の描写は、――

奇異ノ行粧（みなりいでたち）

にとどまり、西洋人はただの“蛮人”であった（田辺八右衛門茂啓編輯「長崎実録大成 第七卷」）。

元亀元年（一五七〇）五月——天草志岐（現・熊本県天草郡苓北町）に「異相の者」が上陸した。イタリアの宣教師グネッキ・ソルド・オルガンティーノ（一五三三〜一六〇九）である。わが国では同人のことを「ウルガン破天連」とよんでいる。かれはいうまでもなく布教のために来日した者であるが、ふつうとは変った人相や姿は、やはり人目をひいたようだ。

その者は、灰色の僧衣をまとった、年のごろは五十ほどの男であった。髪はねずみ色のちぢれ毛。頭の中ほどにかけて頭髪をそっていた。せだけは七尺あまり（二メートル以上）あり、色はくろく、鼻はたかく赤い色をし、目も口も大きかった。歯は白く、馬のものより長く、足の爪はクマのものに似ていた。

このような面相をみた日本人は、オルガンティーノを「天狗」の化身とみたようである。その容貌は絵に描かれ、文章にして報告され、各地に伝わった。かれは織田信長の信任をうけ、京には南蛮寺を、安土には教会と修道院を建立した（「南蛮寺興廃記」「吉利支丹物語」、『日本思想闘争史料 第十卷』所収、名著刊行会、昭和44・8を参照）。

ジョヴァンニ・バティスタ・シドッチ（一六六八〜一七一五、イタリアの宣教師）が、一七〇八年（宝永5）マニラをへて单身屋久島（大隅半島南端——佐多岬の南約六〇キロ）に上陸したが、捕縛された。のち江戸のキリシタン屋敷に送られ、獄中で五年くらしたのち亡くなった。その風貌の第一印象は、相手が大男であったことである。

その長け（身長） 高きこと、六尺には遙に過ぬべし。普通の人は、その肩にも及ばず（新井白石「西洋紀聞 上巻」）。

ふつうの紅毛人とちがっていたのは、黒い髪をしていたことである。深くくぼんだ目、高い鼻をのぞくと、唐人（中国人）や日本人と何ら変らなかつた。

毛髪ハ黒して紅毛の如くに不赤、眼も紅毛人の目のさまに非ず、唐日本人と同じ、鼻のすぐれて高きこそ同じからね、（「異国船漂着多事附薩摩夜久島異人之事」『長崎古今集覽 下巻』所収）。

鎖国下、一般の日本人は西洋人をみることはほとんどなかった。が、和船の乗組員が難波のうめきを見、外国船によって救助されることがあり、そのとき、相手をじっくり観察した。異国の船は、日本人にとっておそろしい船にみえた。漂流民は勇を鼓して救助船にのり移った。本船で見た者は、救助者とおなじような風貌をした見なれぬ異人であった。

何れも髪かみの毛けあか赤あかく、瞳ひとみ白しろく、……〔芸州善松北米漂流譚〕

連れてゆかれたハワイのオアフ島でみた人間は、背のたかい、顔色のくろい、坊主あたまの土着民であった。さらにオアフ島から清国のマカオへむかうアメリカ船に乗せられたとき見た乗組員も、――

髪かみ赤あかく、瞳ひとみ白しろくして、阿蘭陀人オランダ人同様どうようなり〔前掲、漂流譚〕

ということであった。

尾張国名古屋の督乗丸が、江戸から帰航するとき、暴風雨にあい漂流をつづけ、太平洋上でアメリカ船に救助された。救助のボートにのっていた「道斗みちほかりの役人」〔航海長〕は、

いと大だいなる男おとこ、目めは黄色きいろなり、服はは羅紗ラシャの筒袖つづそでを着て、いと恐おそろしき様さまなり〔十七ヶ月めにて異国船を認む〕

という。

万延元年（一八六〇）一月、日米修好通商条約の批准交換のため使節として、正使・新見正興しんみまさとあきら七十七名が、米軍艦「ポーハタン号」で渡米した。

このとき使節一行は、ハワイのオアフ島に寄港した。島に上陸したとき、土着の住民や白人の男女をみている。

土人は男女とも色黒く、女は髪の毛長く黒し（村垣淡路守「遣米使日記」）。

（王宮の）侍女等は 欧羅巴人と見へて 色白く 髪の毛赤色多し（前掲、遣米使日記）。

副使村垣範正（一八一三〜八〇）にとつて、寒心にたえなかったのは、白人の女性は色が白く色っぽかったが、赤毛には興ざめたことである。

女子は色白く艶にして（……）髪の毛赤きは 犬の目の如くにて興ざめけり（前掲、遣米使日記）。

肥後藩士・木村鉄太（一八二八〜六二）は、副使・小栗上野介の随員として渡米した。オアフ島のホノルル滞在中、同輩と旅宿を出て町中を散歩していると、六、七名の白人女性たちから家を見ていけといわれた。

彼女らは紅毛碧眼、美服をまとい、胸や肩をなかばあらわにし、頭には薄く透き通った白紗をのせていた。

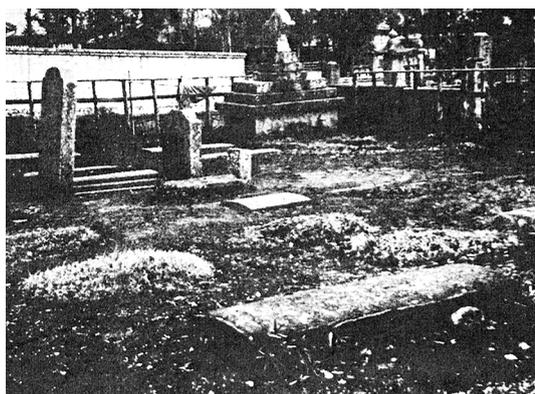
白面紅毛青眸艶姿（なまめかしく、美しい意——引用者。腰ノ細□□ノ如シ。（……）襟開テ 胸肩半ハ露シ。頭ニ白紗ヲ掛テ。薄ク肉ニ透ル）
（始テ米利堅ノ婦人ニ逢ウ）『航米記 第一』所収）。

つぎに日本人がみた“黒人”について述べてみよう。ここでいう黒人とは、アフリカ人や東南アジア人など、皮膚の色がまっ黒であったり、あるいは褐色の人種をいう。南蛮屏風などに、従者や召使いとして黒人が描かれているから、十六世紀——室町から安土桃山時代——には、港町の日本人の目にふれたものであろう。

江戸時代のわが国の文献にたびたび登場するのは、紅毛人（オランダ人）の“奴れい”または“召使い”として来日したジャワ人（インドネシア人）や、アフリカ人である。かれらは江戸時代、軽べつ的に——



オランダ商館の黒人の図



大正時代の稲佐の「オランダ人墓地」。
中央の草のある“どまんじゅう”が“黒人の墓”。
[永見徳太郎著『南蛮長崎草』より]

黒坊くろぼく（漢名・鬼奴クロボウ） 黒すくろす クロンボ ヲランダ スワルト・ヨンゴ 崑崙奴くろんぼ

と呼ばれた。このうち「スワルト・ヨンゴ」は、オランダ語 *Zwart jong*（「黒色の若者」の意）をいったものである。

わが国にやって来た黒坊の多くは、いまのアフリカ人やインドネシア人である。かれらはオランダ人が奴僕ぬぼく（ボーイ）として使うために長崎に連れてきたものである。そのしごとは、オランダ人のそばに仕えて雑用をしたり、食事のとき給仕をしたり、調理場でコックの下役や水くみなどをすることであった。

これらの婢僕ひぼく（下男）は、犬馬けんばとおなじ扱いをうけ、船中で亡くなれば海に投じられ、長崎到着後であれば、遺体をこもに包んで稲佐の悟真寺のオランダ人墓地に埋めた。しかし、墓というものがなかった（「蛮人疾病之事」「阿蘭陀人の墓」）。オランダ人であれば、死んだのち墓石をすえたが、奴僕であるため「どまんじゅう」（土を丸く盛りあげて作った墓）だけであった。

いまの「オランダ人墓地」は、整地し新しくしたものである。大正ごろまで、黒坊墓^{クワフボコ}がいくつもあったが、残念ながらも跡形もない。司馬江漢（一七三八〜一八一八、江戸後期の蘭学者、洋風画家）は、天明八年（一七八八）十月、肥州長崎に遊んだ折、出島においてじっさいじぶんの目で黒坊をみ、写生すらしている。その黒坊（アフリカ人）は、――

アフリカ大洲^{たにしゅう}の中、モノモウタアバと云処^{いんじょ}（十七世紀アフリカ大陸の東南部にあったバンツー族の王国――引用者）の熱国^{ネツコク}の産^{うま}れなり。故に色黒く髪^{かみ}チリ〜と雲珠^{ウンジュ}卷^まになり、総て^{すべ}目鼻^{めびし}も甚^{はなは}だ異^{こと}り……（「江漢西遊日記」）

司馬江漢は、ジャワ人ならぬアフリカの黒人をみたわけであるが、商館長ロンベルグの部屋で、香りのよいういきょう酒をふるまわれたとき、そばにかしづいていたのは黒坊二人であった。

長崎の住民は、ふだん唐人（中国人）をみるのがあっても、出島出入りの者以外、その住人（オランダ人や黒坊）をみることはなかった。長崎近辺の大名ですら、一生にいちど出島入ることができればよいほうであった。

室町から江戸時代の日本人が、外国人をみたとき、とうぜん相手の姿や顔つきが、異相なることに気づいたはずである。まず目にとまったのは、頭髪の色――赤毛、金色、褐色、黒色など――である。ついで相手の目鼻立ちや皮膚や目の色に気をひかれている。それらは当時の日本人からすれば、ふつうとは大いにちがったものであり、とうぜん違和感をもった。

一 “印象” が形づくられる心理過程

外国人の国民性について知ろうとするとき、その基礎になるものは、直接もしくは間接的にえる印象であろう。印象の自覚的^{じかくてき}形成は、ひじょうに重要だとおもわれる。印象が形成される過程は、およそつぎのようなものである。まず感覚的要素として、心象をえねばならない。

――相手の体のかっこう、表情、顔つき、服装、しぐさ、話しかたなどから、その人物の全体的印象をつくりあげるが、このときそれを無意識的におこなっている。相手についての情報をえたら、その性質を知覚し、分析しようとする。この作業は、心理学という“対人認知^{たいじんにんち}”である。そ

してさいごに判断（推断）がくる。この印象形成のプロセスを図式的に言えば——知覚↓認知↓評価（判断）である。

いまのべた印象形成の過程は、相手が個人のばあいであるが、国民性といった大規模な特性をはあくしようとするとき、個々のやり方が当てはまるかといった疑問もある。研究者はなるべくあらゆる階層の大勢の人間と会い、全体像をつくり、総合的判断をくだすしか方法がないようだ。そのとき会った人間の性別・年齢・学歴・職業や風土——その土地の状態——都市・農村・海浜・山国などは——被験者の性格や行動特性に影響があるはずだし、実験者がうける印象もちがったものになろう。

一 概評 西洋人がみた日本人の国民性

本稿において抜粋を試みた来日西洋人二十五名（宣教師、商人、医師、商務員、外交官、作家、学者など）による日本の習俗についての報告書（著述）から、日本人の性格をあらわす表現をひろい出し、国民性を測定することはなかなか容易ではない。かれらはわざわざ实地調査をおこなったのち執筆したわけではなく、じぶんで見たり、人づてに聞いた話や他人の著述が主なる情報源となっている。だからかれらがおこなった日本や日本人についての洞察は、皮相的であり、ときに誤まり、曲解に満ちたものになることは否めない。

しかし、そのような誤びゅうに富む叙述であっても、日本人が見すごしたり、あるいは気づかなかった点が多々あり、ユニークな報告であることに変わりない。かれらの判断の当否をべつにして、その著作が困難な状況下でくだてられたことを多とせねばならない。言語の壁と疎外社会が正確な情報をえ、実情を知ることを読ませたことはたしかである。

このように異国で生まれ、日本でくらしのち執筆した者と、他方来日の経験がまったくなく、第三者の著作をもとに、日本人観を著わした者がいる。後者が書いたものは、間接資料によるため、それほど真新しい記述はないにせよ、価値がないわけではない。中にはするどい批判の目が感じられる、本物の見聞録とみまがうものすらある。

本稿ではこの二種類の西洋人の文章を抜いたが、この中から古き時代の日本人の性格をあらわす言葉——“ほめことば”と“けなすことば”をひろうと、つぎようになる。

十六世紀から二十世紀の間に来日した外国人による日本人評。

〔長所〕

礼儀正しい 色が白い（インド人とくらべて） 神聖なものを重んじる

やさしい 好奇心がつよい 名誉を重んじる

勇敢である 親切である 従順（道理やお上に）

草木を愛する 忍耐がつよい 聡明

快活 器用

〔短所〕

好戦的 偽善的 外見をかざる

狂った王国〔日本〕 ドロボーの国〔日本〕 さい疑心がつよい

高慢（うぬぼれがつよい）〔神の子〕 儀式にあくせくする

執念ぶかい 狡かつ〔商人〕

復しゅう心がつよい 誇りたかい うそをつく

本心を明さない 虚栄心のかたまり〔大学人〕

まず「長所」（美点）のうち「礼儀正しさ」についてのべると、国籍を異にする二十五名の著者のうち約半数が、日本人の長所のひとつにあげ、圧倒的に二位をしめている。それはあらゆる階級にみられる現象である。日本人同士が知人や目上のものと会ったとき、ていねいに体を折りまげてあいさつすることをいっている。「色が白い」ということは、インドや東南アジアの人びとと比べてのことである。「名誉を重んじる」とか「勇敢である」というのは、武家社会の日本人の特性である。

「親切」「忍耐つよさ」「聡明」「快活」「器用」といったものは、日本人の先天的特質もしくは民族的特性といえるものである。

「短所」（感心しない点）——日本人の性格のわるさや腹ぐるさは、生れてからのちに身に備わったものである。つまり先天的な悪い因子が、日々の生活を通して、わるい方に生長発展していったケースである。

ここにぬきだした古き時代の日本人の性格的特性は、長所もあれば短所もある。それらは長い年月の経過をへて、日本特有の風土と歴史のなかではぐくまれたものである。日本民族がもつこれらの特異な性格は、いつときのものでなく、いまに続いているものもある。

変らぬ国民性としてあげることができるものは、つぎのような点であろう。——礼儀正しさ——神聖なものを重んじる——やさしさ（親切心）——好奇心——従順（組織、道理に）——忍耐つよさ（あつさ、寒さ、つらさ、苦しさ、怒りに対して）——器用——外見をかざる——儀式にあくせくする（形式を重んじる。神事・祭事・仏事・礼式にこだわる）——虚栄心がある（みえを張りたがる）。

先進国からみたこんにちの日本および日本人。

ここでいう先進国とは、経済や文化の進んだ世界の主なる国々の意である。いまからみると、データはやゝ古いが、一九八〇年代（昭和50年代）——外務省情報文化局がおこなったEC（欧州共同体）主要国と非加盟国の対日感情（日本および日本人についての「イメージ感覚像」）の調査報告は、つぎのようなものであった。

西ドイツ……………（日本は）平和な国。民主的な国。文化的にすぐれた国。
イタリア……………

イギリス……………好戦的な国。

フランス……………公害の国。

オーストラリア……………（日本は）第二次世界大戦ちゅうの交戦国。工業・製造業の国。人口過密、公害の国。（日本人は）勤勉で規律をおもんじるが、
尊大である。

ECからみた日本国の全体像は——人口の多い国。古い伝統の国。経済大国。美しい国。低賃金の国。不可解な国であった。

他方、日本人の全体像は——勤勉。礼儀正しい。団結心がつよいことであった。

ヨーロッパ人は日本とその国民をべつにして、概して日本の工業製品（オーディオ機器、テレビ、玩具・カメラ・車・時計など）の価格の安さ

や品質のよさを高く評価している（「EC五カ国の対日感情はどうなっているか」『世界の日本人観・日本学 総解説』所収、自由国民社、昭和56・9）。

一九八〇年代後半に、社会心理学の領域から——「世論調査」「内容分析」「実験」の三つの方法を用いておこなった、日本および日本人のイメージについての研究報告がある。

問 日本は近代的なよい国か、すぐれた国か。

アメリカ
西ドイツ
イギリス

フランス
ハンガリー

問 日本は平和的か。信頼できるか。

フランス……優秀で金持の国だが、中味はもうひとつ。

いわゆる発展途上国で、学歴が高いほど日本のイメージがよく、よい結果がえられたという。
日本人のイメージについて。

問 日本人が理解しやすいかどうか。

アメリカ……や、理解しやすい。

西ドイツ
イギリス
フランス
………理解しにくい。
インド
ケニア
………理解しやすい。

問 日本人が親しみやすいかどうか。

西ドイツ………かなり親しみやすい。

日本人の内的な特性としての“知的”とか“勤強さ”については、概して評価は高いが、“信用”“公正”“よい人間か”といった点になると、その評価はややおちるといふ『世界は日本をどう見ているか 対日イメージの研究』日本評論社、昭和62・3。

最近の日本および日本人評。

〔長所〕

いんぎん（人にたいする物腰がていねい、礼儀正しい） 勤勉（労働者、農民、職人）
集団主義 社会的一体感 規律 連帯感

〔短所〕

個性の欠如 個の侵害 臭いものにふたをする 意見をいわぬあいまいさ

根回し社会　非公開　秘密主義　事なかれ主義　責任回避
閉鎖性　外国への排他性　身障者や女性への差別　勤労者の無権利状態
サービス残業　過労死　福祉後進国

注・村上勝敏著『外国人による戦後日本論』窓社、平成9・4を参照した。

日本人のいんぎんさは、むかしもいまも外国人が、ほぼ共通して指摘している日本人の内面的な美点である。が、近年、社会面における、さまざまな問題点が短所として取りあげられていることを忘れてはならない。

むすび

アジア大陸の東隅——太平洋の西に位置し——南北三〇〇〇キロにわたって“弓形”もしくは“虬龍”（竜）のような形をした列島が日本である。日本はどちらかといえば小国である。国土の七〇％が山地であり、平野はすくない。明治維新ごろ、わが国の人口は三〇〇〇万ほどであったが、こんにちの日本の総人口は一億二〇〇〇万以上である。いま日本人は、三〇〇万人以上の外国人といっしょにこの小さな島国でくらしている。

日本人の祖先については、はっきりしたことがわかっていない。その起源は縄文人——石器時代からの住民と考えられている。日本人とはなにか。日本列島と付属の島にくらす人々が日本人である。人種的には、“アジア系黄色人種”（モンゴロイド）の一つである。生粋の日本人は存在せず、われわれは混血民族といえる。

北方アジア

中国　朝鮮

東南アジア

などからの渡来人と混血し、いまの日本人になったと考えられている。

国民性の研究は古くからあり、イギリスのデイヴィッド・ヒューム（一七一―一七六、スコットランドの哲学者・歴史家・政治家）が、『人性

論』(二七四〇年)、『道徳および政治論』(二七四一〜四八年)において論じ、ドイツのヴィルヘルム・ウント(一八三二〜一九二〇、心理学者)も『民族心理学』「十巻」(一九一〇〜二〇年)のなかで、この分野の研究に手をそめた。

他方、わが国においてはどうか。日本では明治二十年代——欧化主義に反対する団体による国粹保存主義が高揚した時期があった。その首唱者は、つぎの人びとであった。

杉浦重剛(一八五五〜一九二四、明治・大正期の国粹主義的教育家)

井上円了(一八五八〜一九一九、明治・大正期の仏教哲学者)

三宅雪嶺(一八六〇〜一九四五、明治から昭和期の評論家)

志賀重昂(一八六三〜一九二七、明治・大正期の地理学者)

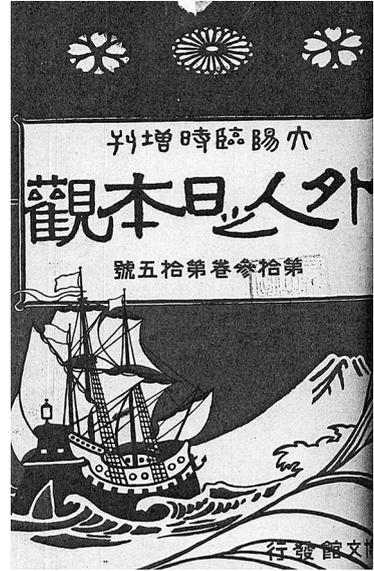
明治二十一年(一八八八)、国粹主義者の団体「政教社」が、これら四名によって結成され、東洋精神を鼓吹するために機関誌『日本人』(明治40年「一九〇七」のち『日本及日本人』と改題)を発刊した。

ことに三宅は、「真善美日本人」「偽悪醜日本人」(明治24年)などの論文を発表したが、これは明治二十年代の代表的な「日本人論」なのである。

日本人は欧米人の体格とくらべると、⁷「体軀矮少」(からだは小さい)であることがはっきりしている。が、文明開化に直接関係するものは、体の大小、背たけの高いひくいではないという。むしろ才知や知恵が大きく作用するという(「真善美日本人」)。

明治三十年代は、日本主義運動が高まりをみせた時期である。これは日清戦争(一八九四〜九五年)後、井上哲次郎(一八五五〜一九四四、明治・大正期の哲学者。東大教授)や高山樗牛(一八七一〜一九〇二、明治期の評論家)らが唱えた運動である。日本の伝統思想とヨーロッパの近代哲学思想を折衷し、君民一体・忠君愛国を首唱し、キリスト教を排しようとした。

芳賀矢一(一八六七〜一九二七、明治・大正期の国文学者。独逸学協会、一高の教壇に立ったのち東大教授)の「国民性十論」(明治40)は、日清・日露戦争後の執筆である。わが国の資本主義は、この二つの戦争のあと、大きな発展をとげるが、自国の勢力や領土をひろげようとし、列



『太陽』の特集号『外人の日本観』
(明治40・11)の表紙

強との争いに巻きこまれていく。芳賀のこの論文は、三宅の時論的なものと異なり、こんにちの日本人論、日本文化論にちかひものであり、けっして冒頭にある「忠君愛国」思想を主張したものではない⁽²¹⁾。

日露戦争（一九〇四〜一九〇五年）後、日本を研究しようとする欧州人がにわかに現れ、著書や論文を発表するようになったので、雑誌『太陽』は、『外国人の日本観』（第13巻第15号）と題する臨時増刊号を刊行した（明治40・11）。これはゆうに単行本に相当する分量があり（約二五〇頁）、

旧日本 英米の日本観 仏人の日本観
 独人の日本観 訪問録 雑纂

などから成っている。ついで大正時代になると、雑誌『解放』が、『日本国民性の研究』と題する特大号を刊行した（大正10・4）。これは明治末年の『太陽』の『外国人の日本観』の倍ちかくもある大部な特集号である（約四七〇頁）。前者は新旧の外国人のみた日本民俗観とすれば、後者は日本人が日本人の国民性を多角的にながめ、分析し論じたものといえる。

『日本国民性の研究』は、各分野の名士五〇名ほどが執筆したものであり、いま大きな項目だけをかかげると、つぎようになる。



『解放』の特集号『日本国民性の研究』
(大正10・4)の表紙

概論	五名
自然的環境より見たる国民性	八名
民族心理より見たる国民性	十名
社会制度より見たる国民性	七名
哲学及倫理より見たる国民性	三名
信仰生活より見たる国民性	五名
芸術より見たる国民性	九名
島国根性検討	三名

鳥井龍藏（一八七〇～一九五三、明治から昭和期の考古学者、人種学者）は、本号の項目「自然的環境より見たる国民性」において、「人類学上より見たる日本人の民族性の一つ」と題する小論を発表している。

かれによると、民族性とは「人種性」のことだという。すなわち、民族がもっている、遺伝的に正しく伝えられるメンタル・キャラクターのことだと言う。比較的正しい、人種民族の遺伝性を保有するものだという。どんな民族にも、共通する「人類性」がある。が、それは民族性のことではない、といい、民族性とは、人類性——地理的影響——歴史的影響などを取り去ったものだといっている。

ひとの性格を決めるものの50%は、遺伝子の影響であるらしい。²²鳥井も民族の体質や骨格や精神などを決定するものは、遺伝だという。かれは民俗学の視点から、日本人の民族性の一つとしてみとめるべきものは、日本人の——、

淡泊（物ごとの感じ、時、色などがあっさりしている意）

潔癖（きれいすぎ、不正をにくむ意）

清浄（きよらかで、けがれがない意）

という。

物質文化の点からいえば、古代の衣服の色は“白色”である。神社の諸物もおおむね“白色”である。一方、精神文化のほうから見ると、古代において、祓い清め（神に祈って、罪やけがれ、災いなどをとり除くこと）がさかんにおこなわれた。

これら三つの特性のほかに、日本人は“靈魂”の存在を信じているという。

戦前の昭和十年代の一時期——日本人論・日本文化論などが高揚し、戦後⁽²³⁾は昭和三十年代以降これらがふたたび流行した。ことに昭和五〇年代から同六〇年代にかけて“日米経済摩擦”が生じると、外国人による戦後の日本論がさかんに刊行された。

いま在日外国人は、われわれ日本人をどのように見ているのであろうか。これも一つの研究テーマになるであろう。

もし外国人から、日本人の国民性（民族性）とはなにか、と聞かれたら、それはこういうものです、とかんたんに答えられそうもない。われわれは顔かたちや体つきが、ひとりひとり違うように、考え方も性格も同じではないからである。

日本人の性格を高所からながめ、一つにまとめることは、容易ではないのである。日本人の国民性について、明快な答えを即座に出せる人がいるとしたら、その人は明敏な頭脳の主主ということになる。大多数の国民が共有しているとみとめられる特性が、国民性であろう。それを単語や数音節の語でいおうとしても、やはりむりがあり、文章をもって表現するしかない。

いま日本人の国民性について万言を費やさず、かんたんにいうとしたら、つぎのようにいえそうである。

——日本人の性格は、相矛盾する要素から成っており、あえていえば、礼節と勤勉さである。

本質的には、その性格は温和であり、仁恕（思いやり）に富み、親切である。礼節を重んじる。秩序にたいして柔順であり、自己を抑制する。他人を顧慮し、自己主張することをきらう。なかなか心の底を明かさない。ときに子どもの仮面をかぶり、うそをついたり、わるだくみをする。うぬぼれがよく、人をあなどり見くだす。

R・F・ベネディクト（一八八七—一九四八、アメリカの女流人類学者。コロンビア大学教授。日本文化論『菊と刀』一九四四年が有名）によると、複雑で矛盾した心性（こころ）をもっているのが、日本人だという。

明治維新後、富国強兵策、殖産振興策をとる日本にたいする欧米人の日本観は、わが国が日清・日露の戦争で勝利をえたころから大きく変わり

はじめた。やがて日本が朝鮮や満州を領有し、さらに日中戦争、太平洋戦争といった国民追従による戦争体制に入るところには、日本人の尊大ぶりや日本兵の野蛮行為が顕著になり、非難中傷をうけ、国民は「東洋鬼^{トシヤクキ}」と中国人から擲ゆされた。

とくに第二次世界大戦でわが国と戦った連合国や占領下にあったアジア諸国では、終戦記念日あたりになると、毎年のように日本の侵略戦争のようすや日本兵の蛮行を撮った記録ものを放映するというし、それがまたこんにち日本人の国民性を誤解したり、日本人を嫌悪する理由になっているものと思われる。西洋人といわず、一般の外国人から日本人の性格を正当に評価してもらうことは、じつにむずかしいといわねばならぬ。

注

- (1) 「^(平成28)二〇一六年 国籍別 目的別 訪日外客数 (確定値)」(日本政府観光局 [JNTO])。
- (2) The Mission of Friar William of Rubruck. His journey to the court of the Great Khan Möngke 1252-1255, Hakluyt Society, London, 1990, p.202
- (3) Contemporaries of Marco Polo, consisting of the Travel Records to the Eastern parts of the world of William of Rubruck [1245 - 1247], Liveright Publishing Corp., New York, 1928, p.152
- (4) 『シヨアン・ロドリゲス 日本教会史 上』岩波書店、昭和42・10、一八七頁。
- (5) リチャード・ハクルートが一六〇一年に、アントニオ・ガルバンの『諸国発見史』(一五六二年)の英訳本を刊行するとき、序文代りに執筆した「献辞 (Dedicatorie) にみられる」は、'Antonie Galvano, a Portugall gentleman.'とある。
- (6) 中川清次郎著『西力東漸本末』¹⁶⁴²⁻¹⁸⁵⁴大東出版社、昭和18・12、三六頁。
- (7) 原文(ポルトガル文)は、左にかかげたもの。船長名と三人のポルトガル人の氏名のほか、Japoes (日本)の文字がみられる。

No anno de 1542 achandose Diogo de freytas no Reyno de Syam na cidade Dodra capiam de hũ nauio, lhe fogiram tres Portugueses em hũ junco q' hia pera a China, chamause Antonio da mota, Francisco zeimoto, & Antonio pexoto. Hindo se caminho p'a tomar porto na cidade de Liampo, q' está em trinta & tãtos graos daltura, lhe deu tal tormenta aa popa, q' os apartou da terra, & em poucos dias ao Levãte viram hũa ylha em trinta & dous graos, a q' chamam os Japoes, que parecem ser aquelas

Sipangas de que tanto falam as escripturas, & suas riquezas : & assi estas tambem tem ouro, & muyta prata, & outras riquezas.

- (8) 蔵並者目 妹尾啓司 『日本史の展開と外来文化』小川書店、昭和36・11、一四九頁。
- (9) 藤田元春著 『日支交通の研究 中近世篇』富山房、昭和13・4、一二一頁。
- (10) 渡辺修二郎 『日欧交通西洋事物伝来の始』『日葡交通 第一輯』所収、日葡協会、昭和4・6。
- (11) 『イエズス会士 日本通信 上』雄松堂書店、昭和43・12。
- (12) ヴァリャーノ著 高橋裕史訳 『東インド巡察記』平凡社、平成17・1、一七六頁。
- (13) 注(4)の一八五頁。
- (14) ヨーゼフ・クライナー編 『ケンペルのみた日本』日本放送出版協会、一九八頁。
- (15) 獨逸 エンゲルベルグ・ケムプヘル原著 同 日本 島田社介抄訳 『日本古代商業史』博聞社印行、明治20・10、49〜51頁。乙名は、「町内の顔役ニシテ(中略)各三人ノ代理者ヲ有ス 称シテ 大組親 或ハ 大組頭ト云フ」とある。
- (16) 呉秀三訳注 『シーボルト江戸参府紀行』雄松堂書店、昭和50・5、四〇一頁。
- (17) オランダの旅行家(？)一六九四。
- (18) 「フォルチューンの日本雜観」『欧米人の日本観 上』所収、原書房、昭和48・1、七八二頁。同書は大日本文明協会版(明治40年刊)の復刻。
- (19) 牧健二著 『西洋人の見た日本史』昭和24・5、二四四頁。
- (20) 『日葡辞典』勉誠社、昭和48・5。
- (21) 生松敬三編 『日本人論 三宅雪嶺 芳賀矢一』富山房、昭和52・8、p.IVの「解題」を参照。
- (22) 土屋広幸著 『性格はどのようにして決まるのか 遺伝子 環境エビジェネティクス』新曜社、平成27・5、七頁。
- (23) 注(21)の一頁。

主なる参考文献

菅 菊太郎著 『日欧交通起源史』裳 華房、明治30・11。
注・本稿において引用した訳書(邦文、欧文)の文献名は、ここに掲げてない。

『太陽臨時増刊 外人之日本観』第13巻第15号、博文館、明治40・11。

- 『益軒全集 卷之一』益軒全集刊行部、明治43・11。
『広益俗説弁 山和事始』国民文庫刊行会、大正元・11。
『文明源流叢書 第三』国書刊行会、大正3・2。
『南蛮紀文選』聚芳閣、大正15・2。
永見徳太郎著『南蛮長崎草』春陽堂、大正15・12。
石井研堂編『異国漂流奇譚集』福永書店印行、昭和2・6。
枅内曾次郎編『増修 洋人日本探検年表』岩波書店、昭和4・2。
『日葡交通 第一輯』日葡協会、昭和4・6。
藤田元春著『日支交通の研究 中近世篇』富山房、昭和13・4。
幸田成友著『日欧通交史』岩波書店、昭和17・6。
中川清次郎著『西力東漸本末』大東出版社、昭和18・12。
牧 健二著『西洋人の見た日本史』弘文堂、昭和24・5。
李家正文著^{りのいなきさみ}『外国人による 日本列島の発見』人物往来社、昭和37・2。
『長崎実録大成 正編』長崎文献社、昭和48・12。
『長崎虫眼鏡 長崎聞見録 長崎縁起略』長崎文献社、昭和50・5。
『長崎古今集覧 下巻』長崎文献社、昭和51・8。
生松敬三編『日本人論 三宅雪嶺 芳賀矢一』富山房、昭和52・8。
『日本大百科全書 18』小学館、昭和62・11。
坂西友秀「鎖国前後における日本人の西洋人観・黒人観の心理——歴史的背景」『埼玉大学紀要教育学部（教育科学）、第51巻第2号、平成14。
『日本 その姿と心』学生社、昭和63・5。
坂井衡平著『日本国民性の史的研究』文書堂、昭和5・10。
『西洋人の見た日本 第三卷』筑摩書房、昭和36・5。
『外国人の見た日本 第一卷』筑摩書房、昭和37・10。
『欧米人の日本観 上』原書房、昭和48・1。

『世界の日本人観 日本学 総解説』自由国民社、昭和56・9。

喜多川忠一著『日本人を考える 国民性の伝統と形成』日本放送出版協会、昭和58・10。

『世界は日本をどう見ているか 対日イメージの研究』日本評論社、昭和62・3。

川西千弘著『印象形成における対人情報統合過程』風間書房、平成12・12。

林伸二「第一印象の形成」『青山経営論集』第40巻第4号所収、平成18・3。

Di Marco Polo e degli altri viaggiatori Veneziani, vol. 1, Co' Tipi Picottiani, Venezia, 1818

Manuel Komroff 編『Contemporaries of Marco Polo, consisting of the Travel Records to the Eastern Parts of the World of William of Rubruck [1253-1255]』
(……), Liveright Publishing Corp., New York, 1928

John Frampton 編『The most noble and famous travels of Marco Polo (……), The Argonaut Press, London, 1929

Antonie Galvano : The discoveries of the world, London 1601, Da Capo Press, Theatrum Orbis Terrarum Ltd. Amsterdam, New York, 1969

The Mission of Friar William of Rubruck, His journey to the court of the Great Khan Möngke 1253-1255, The Hakluyt Society, London, 1990